

岩より水

Not the Rock, but the Water



岩より水

Not the **Rock** but the **Water**



日本語
Japanese pages 2-11



英語
English pages 14-28



韓国語
Korean pages 30-40



中国語
Chinese pages 43-53



ドイツ語
German pages 56-71

小松昭夫氏、イングリッド・ロレマ氏、ホープ・メイ博士等一行及びウィーン平和美術館の皆様から心から感謝する

With special thanks to: Mr. Akio Komatsu, Ingrid Rollema, Hope May and her team, the team of the Peace Museum Vienna

はじめに

フィーリックス・ビラヌーバ¹

この本は一つの出会いから生まれた。それは、日本の事業家小松昭夫とオランダの彫刻家イングリッド・ロレマとの出会いである。生まれた大陸も、育った文化も異なる二人だが、少なくとも一つの価値観を共有している。余人の考え及ばないような独自の方法で、二人は暴力のない社会の実現に向け努力を続けているのである。彼らが出会ったのは2013年の夏、オランダのハーグ市庁舎においてであった。そこで、イングリッド・ロレマが制作したベルタ・フォン・ズットナー(1843-1914)のブロンズ胸像の除幕式がとり行われた。ズットナーは平和活動家として知られており、平和宮創設100周年記念式典で顕彰されたのである。当時はボヘミアと呼ばれた地で生を受けたズットナーは、筋金入りの平和主義者に育っていった。そして、多くの記事や講演を通じて、情熱的に人々に平和を訴えた。1889年、彼女はドイツ語で『武器を捨てよ!』という小説を発表した。これは後に15の言語に翻訳され、ズットナーは、1905年にノーベル平和賞を受賞したのである。

小松昭夫とイングリッド・ロレマは、それぞれ企業家や芸術家として確たる評価を得ている。その上でなお、平和の事業家および平和大使として精力的に行動し、書物や講演等でも発言し、文字通り獅子奮迅の献身的活躍を続けているのである。小松が率いる(財)人間自然科学研究所(HNS)は、主として、東アジアの平和と和解を目的に、先の大戦で日本の侵略により犠牲になった人々のために働いている。

ロレマは、「個人的激励のためのオランダ事務所」(HOPE)の共同設立発起人兼職員として活動をしている。これは、ガザ地区でトラウマや障害で苦しむ子供たちを、美術や文化活動を梃に生きる意味を再発見させようとするものである。

初めて出会ったときから、ロレマと小松は共通の理念に基づいた友情を育んできた。日本人の友人が平和のために努力を傾注している、そのことに感謝の気持ちをこめて、2014年11月、ロレマは1通の手紙を書いた。その手紙は『夢を信じない人は、現実主義者ではない』という小冊子という形をとって発表された。そして新たにこの本が出版されることになったのである。これは前述の小冊子に対する小松の返信という形をとっている。しかし、イングリッド・ロレマの手紙に対する小松昭夫の個人的返信ということに加えて、私はあえてこの一文を寄稿した。それは、小松の思想と行動が、彼の故郷である日本の水都松江市の風景に、如何に比喩的な形で織り込まれているかを知ったからである。



2014年6月、ウィーン平和博物館創立
Opening Peace Museum Vienna, June 2014

¹ フィーリックス・ビラヌーバ (Felix Villanueva) はオランダの批評家。

「和の文化」創造をめざして

親愛なるイングリッド・ロレマ様へ

2014年11月23日、日本、松江市で開かれた小松電機産業主催のシンポジウム『八雲立つ出雲から陽が昇る』では、ロレマ様と友人のマリアンヌ様にすばらしい思い出をたくさんつくっていただき、感謝しています。ロレマ様の芸術を通じた平和活動から生まれる、情熱溢れるスピーチと、平和宮100周年を記念してカーネギー財団の依頼で制作されたベルタ・フォン・ズットナーの1号像、ウィーンでの2号像に続き、このシンポジウムにあわせて創られた3号像の序幕に、600名の参加者は魅了されました。

ロレマ様からの2つのプレゼントにはとても感動しました。配られた600部の冊子によって、100年前にこれからの戦争の凄まじさを小説『武器を捨てよ!』で警告した女性初のノーベル平和賞受賞者ベルタ・フォン・ズットナーの勇気ある活動を参加者は知り、マララさんの平和賞受賞とも重なり、参加者は今の時代を真剣に考えるきっかけになりました。また、貴方の文章が、中・韓・日・英の四か国語に翻訳されているのを見て、贈呈した『四か国語による中国古典名言録』の意図をご理解いただいていることが伺え、とてもうれしく思いました。

貴方がこのシンポジウムに先立ち訪問された「板門店」と、韓国の安重根義士記念館は、120年にわたり対立が続く北東アジアの象徴的現場です。

The Theatre of Wrong Decisions(誤った決断の劇)の動画と、送られてきた紛争が続くガザ地区で絵を描く難民の子供達の笑顔の写真を見て、芸術を通じて禍を福にできる人材に育っていることが感じられ、感動しました。

貴方からのもうひとつのプレゼントは、東京で別れ際に頂いた、大きな黒い貝殻に入ったスノードロップスの小さな球根でした。長い冬の寒いなか、忍耐の時を経て雪の中から芽を出し、「春を伝える、希望を意味する花」と言われました。貴方が松江の老舗菓子店「彩雲堂」で開かれた伝統工芸菓子と樹脂粘土作品展に訪れたことで、古賀隆昭・操子夫妻による樹脂粘土のスノードロップスが生まれました。「めだか論語」に参加する女性達を中心に花の栽培も始まりました。

スイス・アルプスを源流とする“悠久の河”ライン川の河口に位置する、オランダの粘土から生まれる貴方の作品は、ヨーロッパの自然と歴史を正面から受け止め、平和への強い祈りを表現していると伺いました。私は出雲の支援者とともに、日本文化の発祥地とも言われる故郷の“悠久の河”意宇川沿いの出征兵士を見送った地に、日中戦争の激戦地、中国山東省で制作された周藤彌兵衛翁像を建立しました。そこにスノードロップスの花壇をつくる構想と、翁の一生を描いた日英二か国語による小説『悠久の河』(村尾靖子著)の出版、普及活動を続けています。東洋と西洋、伝統と現代、ロレマ様の「愛」と出雲の「和」がハーモニーを奏で、プロジェクトが進んでいます。

今日、中国、露国、米国の核大国の緊張がつづく世界情勢の中で、極東の日本列島と朝鮮半島は、大国間の緊張が続くヨーロッパの中から永世中立国スイスが生まれた当時のような状況に置かれていると認識しています。

「歴史を学び、仮説を立て試行錯誤から生まれるひらめきを信じ、それを形にすることが芸術の本質」という貴方の考えと、「いかなることがあっても人を憎まない」というお父様の教えは、社会問題から商材を生み出し、市場を創造してきた私の経営と共鳴、大変感動しました。150年前、ギリシャからアメリカを経て日本・出雲で結婚、「オープンマインドを」提唱した小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)と、400年前に貴女の国と縁を結んだ日光東照宮の回転灯籠、貴方の言葉と作品が私の頭の中で繋がり、対立を統合・発展に導く「新しい和の文化創造」の使命を再認識させてくれました。

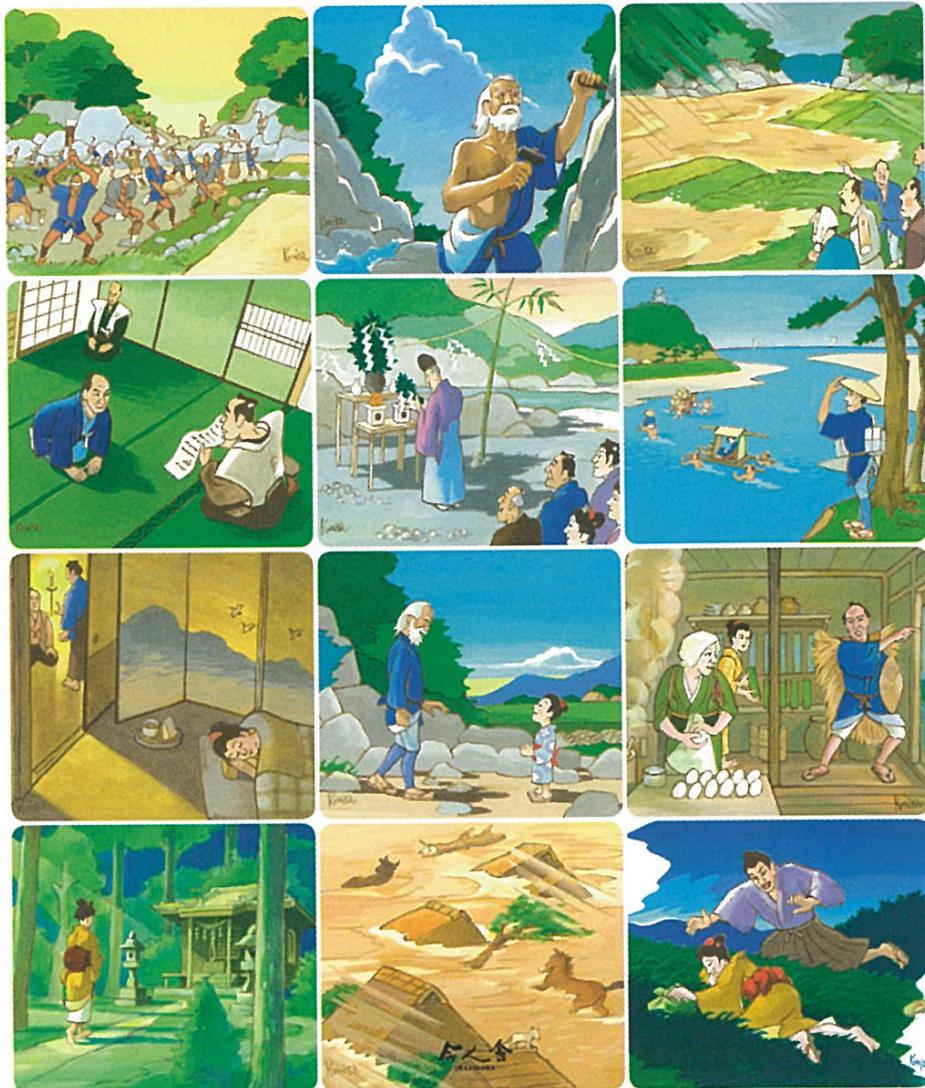
人間自然科学研究所
小松電機産業株式会社
代表 小松 昭夫

悠久の河

周藤彌兵衛翁物語

The Eternal River A Story of Sutoh Yaheo

文 村尾靖子
written by Yasuko Murao
 絵 クミタ・リュウ
illustrated by Ryu Kumita
 英訳 ノビー・キーリー
translated by Nobby Kealey



1988年小松昭夫氏は人間自然科学研究所の前身「知革塾」を開塾。1993年交易場修氏の周藤彌兵衛翁の小説執筆をきっかけに、1999年平和事業構想書『太陽の國 IZUMO』を発刊、世界の戦争平和記念館を公式訪問、歴史に学び、未来を拓く研究所の活動が本格化した。

2014年に建立された周藤彌兵衛翁像の案内板には、出雲神話の「和譲」精神を現代によみがえらせ、人類の「終戦」への流れを生み出すために、3人の先人たちの名言が記載されている。

「歴史に盲目的な人間は、現在に対しても盲目である」—リヒャルト・フォン・ワイツェッカー(1920-2015:ドイツ連邦共和国元大統領。)

「理念なき経済は犯罪、経済なき理念は戯言(たわごと)。一家を廃して万家を興す」—二宮尊徳翁(1787-1856:日本の江戸時代の農政家・思想家。)

「青春とは人生の或る期間を言うのではなく、心の様相を言うのだ。優れた創造力、逞しき意志、炎(も)ゆる情熱、安易を振り捨てる冒険心。こう言う様相を青春と言うのだ」—サミエル・ウルマン(1840-1924:アメリカの詩人、実業家、人道主義者。)

岩より水

フィーリックス・ピラヌーバ

時は川の水のごとく流れ行く —孔子

ロシアで生まれてアメリカに帰化した詩人ジョセフ・ブロドスキー(1940-1996)¹の名著『水位標』は、ちょっとメランコリックな感情を伴った、ベニスに対する彼の愛の宣言書である。ベニスは水の都と言われるだけあって、その本質は常に変化する水を反映している。その本の中で彼は、時は神である、という注目すべき考えを述べている。「私は常に、神は時ではないかという考えに固執してきた。少なくとも、神の精神は時間ではないか。これは多分、私の独自の考えだと思うが、そうとはっきり断言できるわけではない。いずれにせよ、もし神の精神が水面に現れたとしたら、水はそれを反射するに違いないと考えたのだ。」²

バルチック海の内海で育ったブロドスキーは、聖書にある神という語を固定的な概念としては捉えず、無色透明で敏捷かつ流動性を備えた要素であると考えた。確かに水は、時と同じように止まるところを知らない。時は水のように流れて、すべての人の思惑も行為も、歴史の中の善も悪も、その流れに飲み込んでしまう。有限の生命しか持たない我々人間は誰もその流れに抗することはできないのだ。しかしながら、すべてのものを包含する時間—ブロドスキーは、これを水が反射する神と考える—に対する、人間の終わりのない挑戦こそが、我々の存在理由だと言えるのかもしれない。

オランダの哲学者であり作家でもあるルネ・テン・ボスは最近の著書『水：地理哲学の歴史』の中で次のように述べている。即ち、一つの考えの元となるものは、単に主体と客体との関係に帰されるべきものではなく、その考えが生み出された具体的な環境の果たした無言の役割についても考察しなければならないとする。「風景、環境あるいは空間といったものは、単なる物理的、物質的な現象として、人間抜きで考察されるべきではない。人間精神の働きと関連付けてその役割を見る視点が必要である。」³

テン・ボスは、例えば、河川的精神と海洋的精神とは、哲学的概念を異にすると主張する。河川に囲まれ、河川的精神を持つ哲学者としては、例えばギリシャのヘラクレイトスがある。「万物は流転する、留まるものは何もない。」は彼の名言としてよく知られており、今日においてもその価値は失われていない。海辺で育ち、海洋的精神の持ち主となった哲学者の例としては、ヘラクレイトスと同じくソクラテス以前の哲学者である、ミレトス(学派)のタレスがいる。彼は、万物の根源は水であり、すべては水から生じる、と考えた。水の都ベニスの光景が、幼児期からのバルチック海の風景と相ま

って、ジョセフ・ブロドスキーの心象風景を形成し、神、時、水に関する独自の思想を生み、ついにはそこに埋葬されたいと願うに至ったことは想像に難くない。

松江市は、本州の南西に位置する島根県の東北にある日本海沿いの市である。そのユニークな地勢的位置づけにより、「東洋のベニス」と呼ばれることもある。市の北側には日本海と宍道湖・中海を隔てる島根半島があり、海から守られる形になっている。大橋川は、ともに汽水湖である西の宍道湖から東の中海へと市を貫いて流れ、満潮時には川の流れが逆になる。

事業家であると同時に平和の大使でもある小松昭夫は、日本の国の発祥地のひとつともいわれる、松江市八雲町に生まれた。島根県内の農機具メーカーに勤務、農業機械の研究開発に従事したのち、会社の倒産を契機に、「悠久の河」意宇川の畔にある生家の納屋から事業を起こした。

50代になると、島根半島越しに朝鮮半島、ユーラシア大陸に向き合う宍道湖の畔に新しく事業所を建設した。その明媚な景観に加え、近辺には多くの温泉も湧いており、大自然の恩恵に満ちた好立地である。

人類進化のための共感のプラットフォームを用意し、所謂「和の文化」の創出を図る彼のアイディアの数々は、小松の心に流れる数々の故郷の水の流れに起因し、発展してきたのかもしれない。意宇川の流れや、宍道湖に立つさざ波の反射光が脳の進化に影響した可能性もある。

小松電機産業株式会社の社長としての、あるいはまた、人間自然科学研究所の理事長としての小松が、水から靈感やヒントを得たと考えることは驚くにあたらない。会社にあっては、世界で最も進歩した種類のエレクトロニック水総合管理システムの一つを開発し、八雲の水の神様「やくも水神」と命名した。

小松の講演やインタビューにおける重要なテーマの一つは、水に関する世界的な緊急課題とその責任とが、全人類に共有されなければならないということである。こうした自説を述べる際に、彼はよく孔子や孟子、それに老子などの古代中国の賢哲の格言や比喩を引用する。⁴

1994年、小松は人間自然科学研究所(HNS)を創立し、彼の故郷の水に係る歴史へのこだわりを示して、「一村一志運動」を展開した。この運動の一つが、故郷で水利

に係った偉人達の業績を、伝記小説、児童文学、漫画、シンポジウムなど様々な形で顕彰することであった。2015年に至って、戦後70周年を記念して、村尾靖子作の小説『悠久の河：周藤彌兵衛翁物語』を世に問うた。この本は日本語と英語の対訳本として出版された。周藤彌兵衛は17世紀から18世紀にかけて生きた宍道湖畔に位置する日吉村の庄屋であった。日吉村は現在では、松江市八雲町の一部になっている。

意宇川は、普段は、日吉村を流れる恵み豊かな平和な川であった。川が村に入る所で流れは聖なる山、剣山にぶつかって山を迂回する格好になる。剣山というのは、この世とあの世の境界に聳える山だと信じられていた。ひとたび豪雨に見舞われると、剣山が流れを堰き止める格好になり、辺り一面を一変させる大洪水の引き金となった。大量の水が川から溢れ堤防が決壊した。家は壊され人々は溺死し、文字通り村中が洪水に流されてしまったのである。

辛うじて生き残った村人達の顔を見た時、56歳の彌兵衛は決心した。生涯をかけて、山を何とかしようというのである。彼は言った。「自分の幸せより、村人達の幸せが先だ。」金槌と鑿を手に、川の流れを変えようと、彼は岩山に立ち向かった。かくして、日吉村は洪水の危険から救われることになった。この事業を終えた時、彼は97歳になっていた。5年後安らかに息を引き取ったのである。

共同体の幸せを願って、自分の人生の大半を、川の流れを変えることに費やした男の物語は、辛抱、忍耐、不屈の精神、共感を表す想像的比喩として読むこともできる。即ち、周藤彌兵衛の不屈の精神と、さらなる苦しみから仲間の村人を救うのだという岩のように固い決意から判断すると、彼が真の理想主義者でありかつ楽観主義者であることがよく分かる。

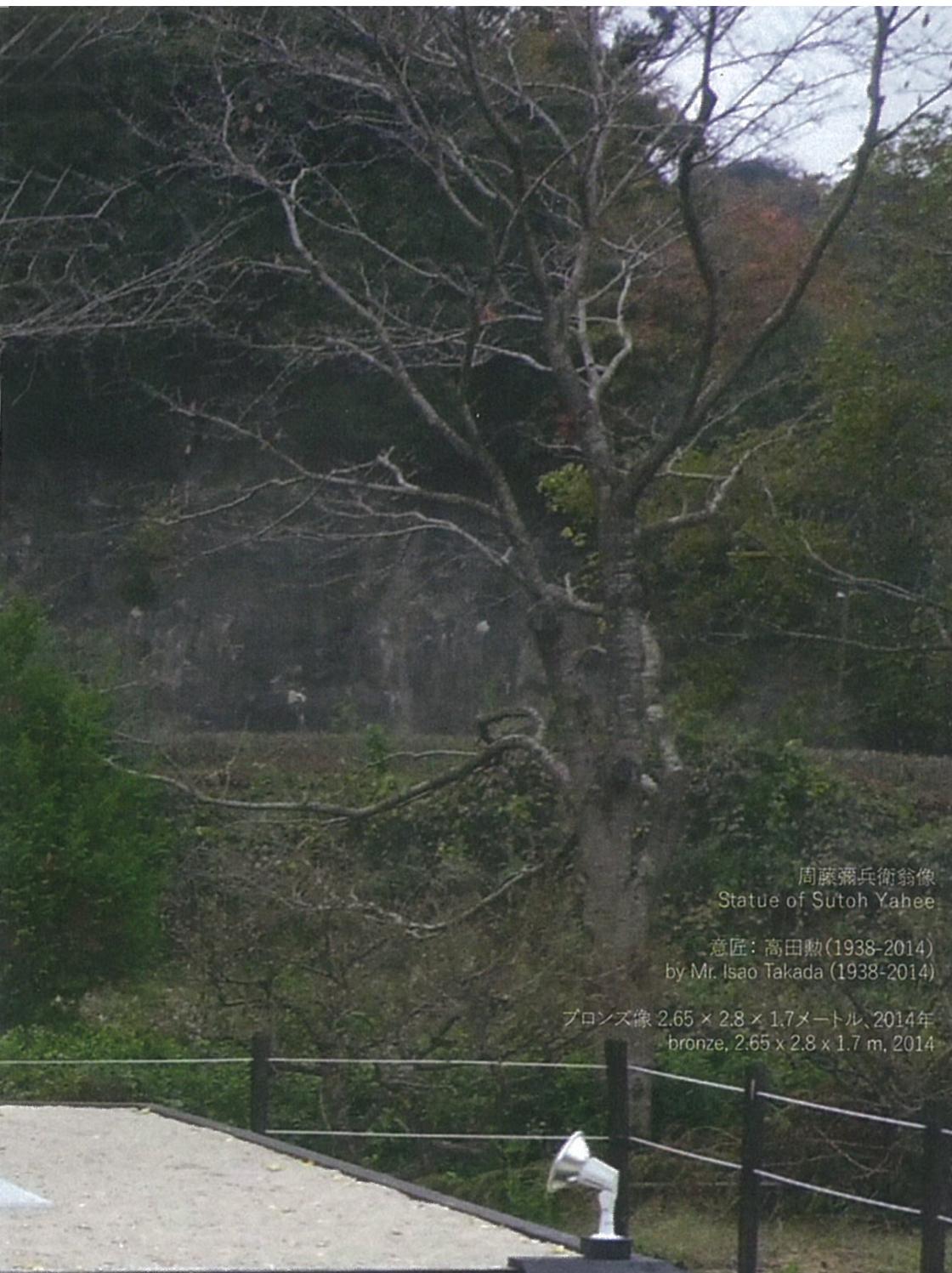
小松昭夫は、世界の平和と和解のために、そして世界文化の発展のために、彼の真心と魂を注いで地球規模で努力をしている。進取の気概に富んだ会社の社長とて多忙を極める中、国際分業⁵、核拡散、スマートフォンの時代を生かし、具現化に必要な布石を打つべく、多くの国への訪問を続けている。核保有国の段階的な核削減のプロセスにおいて、世界各国が平和共存する日が来ることを決して疑っていないのだ。平和へのスタート地点の一つは、中国、ロシア、アメリカという三大核大国の力が拮抗している朝鮮半島の対岸に位置する日本の出雲である。小松の目は、朝鮮半島と日本列島の非核化の確かな潮流が、出雲の地から流れ始めるのをしっかり見ているのである。

小松昭夫は、自分の使命とするところに人々の関心と呼ぶために、政治家がとるようなハードな政治的戦略は取らない。そうではなく、水の流れのようにロジカルでインフォーマルな民間外交とでも呼ぶべき、穏やかな道を歩んでゴールを目指す。それは何故か？ 紀元前6世紀の中国の哲人老子は次のように述べている。“天下に水より柔弱なるは莫し。而れども堅強を攻むるは能く之に先んずる莫し。”⁶

- ¹ ジョゼフ・ブロドスキーは1940年、当時はレニングラードと呼ばれたサンクトペテルブルグで生まれた。数度のシベリア追放の後にアメリカに渡り永住する。戦後ロシアの最も影響力のある詩人の一人とされ、1987年ノーベル文学賞を受賞する。1996年、心臓麻痺により急死、ベニス近くにあるサン・ミケーレ島に埋葬された。
- ² ジョゼフ・ブロドスキー著『水位標』、ファーラー、シュトラウス&ジルー出版、ニューヨーク、1992年、41頁。
- ³ ルネ・テン・ボス著『水の地理哲学史』、アムステルダム、2014年、14頁。
- ⁴ 老子が創始者であるとされる、生の哲学道教によると、最高の善は水の如し、ということになる。水は日常生活における、謙譲、適応性、忍耐、オープンマインドなどの美德を表すイメージとして使われている。
- ⁵ 経済学で言う「(労働の)国際分業」とは、各国がそれぞれ得意とする生産部門に特化していくことを指している。結果として、多様な経済活動が世界的規模で展開されるようになる。この分業のグローバル化を示す専門用語として「労働の新国際分業」という用語が生れた。この流れの中で工業技術は先進資本主義国から開発途上国へと移転される。
- ⁶ 老子道德経 78章。



安重根の肖像と手形
Portrait and hand of Ahn Jung-Geun



周藤彌兵衛翁像
Statue of Sutoh Yahee

意匠：高田勲(1938-2014)
by Mr. Isao Takada (1938-2014)

ブロンズ像 2.65 × 2.8 × 1.7メートル、2014年
bronze, 2.65 x 2.8 x 1.7 m, 2014

Introduction

by Felix Villanueva¹

This publication stems from a chance meeting between the Japanese captain of industry Akio Komatsu and the Dutch sculptor Ingrid Rollema who, although originating from different continents and cultures, share at least one quality. In an extraordinary way they are both dedicated to realizing a society without violence. They met each other in the summer of 2013 in The Hague City Hall, the Netherlands, where a bronze portrait statue of peace activist Bertha von Suttner (1843-1914), made by Ingrid Rollema, was unveiled on the occasion of the centenary celebrations of the Peace Palace in The Hague. Von Suttner, who was born in what was at that time called Bohemia, was a confir-



松江市の彩雲堂を訪れた古賀隆昭・操子ご夫妻と小松昭夫氏
Mr. Takaaki Koga, his wife Masuko and Akio Komatsu in the store Saiun-do in Matsue

med pacifist who made a passionate plea for peace in a great number of articles and lectures. In 1889 her novel *Die Waffen Nieder!* was published in German and later translated into fifteen other languages. In 1905 she was awarded the Nobel Peace Prize.

Akio Komatsu and Ingrid Rollema not only distinguish themselves in their daily professional careers, but also in their work as dedicated ambassadors of peace who are able to express their missions as much in words and writing as in actions. The former as leader of the Human, Nature & Science Research Institute Foundation (HNS) that is focused on the advancement of peace and reconciliation in Eastern Asia and devoted to the cause of the victims of Japanese aggression, especially in China and Korea during World War II. The latter as co-founder and project staff member of the Holland Office for Personal Encouragement (HOPE) that, through lessons in the fields of art and culture, helps traumatized and handicapped Palestinian children in the Gaza Strip to rebuild a meaningful life.

Since their first meeting Ingrid Rollema and Akio Komatsu have forged a close friendship rooted in congenial ideals. Out of appreciation for her Japanese friend's efforts for peace, Rollema wrote him a personal letter in November 2014 that was released as a small book publication under the title *Whoever doesn't believe in dreams is not a realist*. The publication that is now before you is a reaction by Akio Komatsu on the aforementioned booklet. Apart from his personal reply to Ingrid Rollema's letter I have contributed a reflective text myself in which the person and actions of Akio Komatsu are metaphorically weaved into the aquatic landscape of the Japanese city of Matsue, his native soil.

¹ Felix Villanueva is a Dutch publicist.

For the creation of 'Culture of Harmony'

Dear Ms. Ingrid Rollema,

Thank you once again for coming all the way to Matsue, Japan to take part in our international symposium The Sunrise from Izumo, held on November 3, 2014. I will cherish the beautiful memories I have of you and your dear friend Ms. Marianne Kleijwegt. I was indeed deeply moved by your passionate speech which stemmed from the work you do through your peace movement and your activities as an artist. I was also impressed and charmed, together with the 600 other symposium participants, by your statue of Bertha von Suttner (number 3) which was unveiled on that day. You had already created a first edition of this statue on the occasion of the centennial anniversary of the Peace Palace in The Hague and a second one for the Peace Museum in Vienna.

I also wanted you to know that I truly appreciated the two special gifts you presented during your stay. The 600 copies of your booklet that were distributed among the participants of the symposium - and also the news that Malala Yousafzai was awarded the Nobel Peace Prize - certainly helped us reflect seriously upon the age we are living in now. The booklet charmingly illustrated the courageous activities for peace of Bertha von Suttner, who, through her novel *Lay Down Your Arms!*, already warned the world 100 years ago against the devastating effects of modern warfare.

I noticed that your booklet was translated into four languages: Chinese, Korean, Japanese and English. The book entitled *The Chinese Classic Quotations* that I gave to you earlier was also translated into these four languages. I was glad to find out that you understood my reasons for having it published in these different languages.

On your way to Japan you visited the village of Panmunjom and the Ahn Jung-Geun Memorial Museum in South Korea. These are just two of the symbolic places in North East Asia where confrontations have never stopped for the past 120 years.

Watching the video clips of the Theatre of Wrong Decisions and see-

ing the pictures of the smiling faces of the refugee children in your art class in the conflict-stricken Gaza strip deeply impressed me. You are indeed helping them to grow through art and enable them to turn misfortunes into blessings in the future.

Another gift from you were small snowdrop bulbs contained in big black seashells. You gave them to me when we said goodbye to each other in Tokyo. You told me that snowdrops are flowers of hope; after enduring the long, severe winter, on the still snow-covered ground they are the first to announce the arrival of the long-awaited spring season. You might be interested to know that after you visited the exhibition of traditional Japanese confectionery and resin clay art works at a long established confectionary store called Saiun-do in Matsue, Mr. Takaaki Koga and his wife Misako started making snowdrops using resin clay. The lady members of 'The Medaka-fish Analects Study Group' and some others have already planted the bulbs.

Holland is located at the mouth of the Rhine, the eternal river which originates in the Alps in Switzerland and flows all the way down to Holland carrying clays from European lands. You told me your art works, which were made of clay from Holland, ultimately reflect European nature, history and the hearts of the people. With similar thoughts in mind. I made the statue of Sutoh Yahee in Shandong Province in China, the scene of a hard-fought battle with China during World War II, and erected it on the eternal river Lu in the district of Izumo-Yakumon which is supposed to be a birth place of Japanese culture. We are now planning to make a snowdrop flower garden there. Also, the novelist Ms. Yasuko Murao recently published a book on Sutoh Yahee entitled *The Eternal River* both in Japanese and English. These projects are propelled by a joint harmony of the East and the West, tradition and modernity, and the love exemplified by you and the culture of 'Wa (peace/harmony)' of Izumo.

The Japanese Archipelago and the Korean Peninsula are located at the geopolitical center of continuous international tensions between three nuclear superpowers: China, Russia and the U.S.A. The situation, I think, is similar to that of Switzerland when it became a country of permanent neutrality.

You told us that you try to learn from history, build your own hypotheses upon provable theories and in the midst of the struggles of trial-and-error you may find some kind of inspiration and give it an artistic form. You call it the essence of your art. I realized with great pleasure that your train of thought plus your father's philosophy never to hate others is similar to mine. I try to find my business chances in social problems and create new markets for my business. That has always been the way I operate my business.

Lafcadio Hearn, who was born in Greece and lived in Matsue, after a stay in America, advocated the idea of 'Open Mind'. Both philosophies pushed me back on my pursuit of 'Culture of Harmony'. Indeed, meeting you and Ms. Marianne Kleijwegt has strengthened my belief in it. After all, Holland and Japan have cherished mutual friendship and a peaceful relationship for centuries, as symbolized by the rotating lantern at Nikko Toshogu Shrine.

You helped me reconfirm my mission to create a 'new culture of Wa (peace/harmony)' on the stage of sympathy where confrontations, syntheses and development will take place.

Akio Komatsu

President Komatsu Electric Industries Co., Ltd.

The Human, Nature & Science Institute Foundation



2014年11月シンポジウム開催直前のロレマ氏と金氏
November 2014 Ingrid and Mijeong Kim before the start of the conference

In 1988 Mr. Akio Komatsu started Chikaku-juku, a school for young business leaders and the precursor of the Human, Nature & Science Institute (HNS) of today that aims to innovate society through wisdom. Mr. Osamu Kouekiba wrote in 1993 a biographical novel on Sutoh Yahee which led to the publication in 1999 of *IZUMO: The Land of the Rising Sun*, a book on Mr. Komatsu's plan for peace. He then made official visits to war/peace museums all over the world to learn from history and open doors to the future by making use of the full capacity of HNS.

In 2014 the statue of Sutoh Yahee was built. The statue was accompanied by words of wisdom from three advocates of peace. They were chosen in order to create a new current for terminating all wars in the world by reviving the 'wajo (ideal give-and-take)' spirit as seen in Izumo mythology.

"Those who close their eyes to the past become blind to the present."
- Richard von Weizsäcker (1920-2015: Late President of the reunified Federal Republic of Germany).

"The economy without ideas is a crime, and the idea without economy is nonsense."

"A family is given up and ten thousand families are promoted."
- Ninomiya Sontoku (1787-1856: agricultural specialist, moralist and philosopher in the Edo period).

"Youth is not a time of life - it is a state of mind; it is a temper of the will, a quality of imagination, a vigor of the emotions, a predominance of courage over timidity, of the appetite for adventure over love ease."
- Samuel Ullman (1840-1924: American poet, businessman and humanitarian).



Not the Rock, but the Water

Felix Villanueva

Time flows away like water in a river
Confucius

In his expertly written essay, *Watermark* – a declaration of love, punctuated by melancholy, to Venice, the city that derives its essence from its own perpetually changing reflection in the water – the Russian-American poet Joseph Brodsky (1940-1996)¹ utters the remarkable notion that God equals Time: “I always adhered to the idea that God is time, or at least that His spirit is. Perhaps this idea was even of my own manufacture, but now I don’t remember. In any case, I always thought that if the Spirit of God moved upon the face of the water, the water was bound to reflect it.”²

Brodsky, who grew up on the shores of the Baltic Sea, uses these biblical phrases to equate the Supreme with the element that, by virtue of its fluidity, agility and translucency, cannot be seen as a static concept. To us, water appears just as elusive as time, the almighty continuum that carries along all human thoughts and actions, all good and evil in the history of the world in a continuous stream that we, mortal creatures, will never cease to resist. The eternal struggle against the all-encompassing effect of time – the Spirit of God reflected in the water according to Brodsky – may, however, be part of the meaning and purpose of our existence.

In his recent book *Water: A geophilosophical history* the Dutch philosopher and writer René ten Bos assumes that the origin of an idea cannot merely be attributed to the relationship between subject and object; the specific environment in which the idea is developed also plays a, contemplative, role. “The landscape, the environment or the space cannot be exclusively understood as a physical or material phenomenon. There is a mental aspect at play as well.”³

For instance, Ten Bos distinguishes between the philosophical concepts of *potamical* and *nautical* minds. The first category includes thinkers who were surrounded by rivers, such as the Greek philosopher

Heraclitus whose famous dictum *Panta rhei, ouden menei* (Everything flows, nothing remains) is still valid in our day and age. The second category includes those who lived on the seashores, such as Heraclitus’ pre-Socratic predecessor Thales of Miletus to whom the notion that all things are water or stem from water is attributed. It is highly likely that the ‘mental’ lagoon landscape of Venice, the city where Joseph Brodsky – who strongly associated the Baltic Sea water, as well as its surroundings, with his childhood memories – wished to be buried, especially inspired him to formulate his original ideas about God, Time and Water.

The coastal city of Matsue, situated by the Sea of Japan in the north-east of the Shimane prefecture and in the southwest of Honshu Island, is sometimes called the ‘Venice of the Orient’ because of its unique location. The northern part of the city is situated on a peninsula separating the Sea of Japan from the two lagoons, Shinji Lake and Nakaumi Lagoon. The Ohashi River flows from west to east through the town between the lagoons. The flow of the river reverses at high tide.

The entrepreneur and peace ambassador Akio Komatsu was born and raised in Yakumo Town, Matsue city, which is believed to be one of the birthplaces of Japan. He got a job at a local agricultural machinery manufacturer and was involved in the research and development of farm machines. After the company went bankrupt, he started his own business in a barn in his birthplace by the ‘Eternal River Iu’.

In the fifties he built a new business establishment on a hill overlooking the beautiful Shinji Lake at the foot of the Shimane Peninsula, which is located on the other side of the Korean Peninsula and the Eurasian Continent. With its many hot springs it is an area that is truly blessed by mother nature.

韓国と北朝鮮軍が直接対峙する共同管理地帯、でロレマ氏が購入したクレジットカード入れ
Credit card box that Ingrid bought in the Joint Security Area, where the North and South Korean armies are directly facing each other



Komatsu has been working hard to prepare platforms of sympathy for the sake of human advancement trying to create the Culture of *Wa* (peace/harmony). It is likely that those ideas of his were spiritually developed with the many water streams of his native soil in mind. The streams of the River Iu and the reflections of the rippling lakes may well have made a lasting impression on his psyche as he was growing up.

As Director of Komatsu Electric Industries Co., Ltd and as leader of the Human, Nature & Science Research Institute Foundation (HNS), it is no wonder that he feels inspired by water. With his company in Matsue, he developed and produced one of the most advanced electronic water management systems in the world. He named this system *Yakumo Suishin*, Water God of Yakumo.

An important theme in Akio Komatsu's lectures and interviews is our shared responsibility for the pressing worldwide problems concerning water. He enforces this topic by quoting proverbs by Confucius, Mencius and Laozi, the classic Chinese philosophers.⁴

In 1994 Akio Komatsu demonstrated his involvement with the water-related history of his native soil by founding the Human, Nature & Science Institute Foundation and starting the 'One village, one aspiration campaign' that included, among other things, the publication of biographical novels, children's books and cartoons and the organization of symposiums to showcase the great men who played an important part in controlling the water. In 2015, in commemoration of the 70th anniversary of the end of World War II, Komatsu released the novel *The Eternal River: a Story of Sutoh Yahee* written by the Japanese writer Yasuko Murao. This book, written in Japanese and English, is based on the legend of Sutoh Yahee (1651-1752), a chieftain of the village of Hiyoshi on the Shinji Lake. Today, the village is called Yakumo and is part of Matsue city.

The story is set in a time when the river Iu flowed peacefully and calmly through Hiyoshi and offered the villagers many good things. In its

course to the village, the river was interrupted by the holy mountain of Tsurugi that marked the border between the Land of the Living and the Land of the Dead. One day, the landscape was plagued by torrential rains and the holy mountain became an obstacle that caused heavy flooding. The river was unable to process the enormous amount of water and burst its banks. Houses were destroyed, people were killed and virtually the entire village was swept away.

On seeing the fear in the survivors' faces, Sutoh Yahee decided at the age of 56 to spend the rest of his life fighting the mountain. 'I place my happiness behind the happiness of the villagers,' he said. Using a hammer and a chisel, he started excavating the rock to change the course of the river. That way, Hiyoshi would no longer stand the risk of being flooded. When Sutoh Yahee finished this task he was 97 years old. Five years later, he died in peaceful rest.

The story of the man who sacrificed the greater part of his life to change the course of the river for the benefit of the community may be read as an imaginative metaphor for endurance, fortitude and empathy. Sutoh Yahee's tenacity and rock solid conviction that he should protect his fellow-villagers from more tribulations make him a true example of idealism and optimism.

Akio Komatsu puts his heart and soul into his efforts for peace and reconciliation throughout the world and for the development of a world culture. In addition to his busy job as a director of an innovative corporation, he visits many countries in order to lay the foundations for the new age by using the vectors of international division of labour⁵ and nuclear proliferation to his best advantage in this age of the smart phone. He believes that the day of worldwide, peaceful coexistence will surely come through the process of gradual nuclear disarmament. One of the starting locations for a process such as this will be the land of Izumo in Japan that is located on the other side of the Korean Peninsula where

three large nuclear powers meet: China, Russia and America. In Komatsu's eyes the steady current of the denuclearization of the Korean Peninsula and the Japanese Archipelago begins to flow from Izumo.

Akio Komatsu does not follow the strategic paths of hard politics to draw attention of his self-selected mission: rather, he follows the logical and flowing roads of 'informal diplomacy' to reach his goal. Because, as the Chinese philosopher Laozi said in the 6th century B.C.: "Under heaven nothing is more soft and yielding than water. Yet for attacking the solid and strong, nothing is better: it has no equal."⁶

-
- ¹ Joseph Brodsky was born in 1940 in St. Petersburg, then known as Leningrad. In 1972, after being exiled to Siberia several times, he settled in the United States, where he would live for the rest of his life. He is seen as one of the most influential poets of post-war Russia. In 1987 he was awarded the Nobel Prize in Literature. In 1996 he died of an unexpected heart attack. He was buried on the island of San Michele near Venice.
 - ² Joseph Brodsky, *Watermark*, Farrar, Straus and Giroux Inc., New York 1992, p.41.
 - ³ René ten Bos, *Water, een geofilosofische geschiedenis (Water. A geophilosophical history)*, Amsterdam 2014, p.14.
 - ⁴ In Taoism, the philosophy of life of which Laozi was the progenitor, the supreme good is like water. The image of water is used to describe values such as humility, adaptability, endurance and acceptance in daily life.
 - ⁵ In economics, the term 'international division of labour' refers to the specialization of particular countries in distinct branches of production, resulting in an increasing worldwide diversity of economic activity. As a result of globalization, theorists have coined the phrase 'new international division of labour' to explain the geographical shift of manufacturing industries from advanced capitalist countries to the developing countries.
 - ⁶ Dao De Jing II, 78.



国際シンポジウム会場に到着したズットナー像
Statue arriving at the conference hall in Matsue

머 리 말

펠릭스 빌라누바¹

이 책자를 출판하게 된 계기는 일본의 사업가 고마츠아키오와 네덜란드의 조각가 잉그리드 롤레마의 만남으로 거슬러 올라간다. 태어난 대륙도 자라난 문화도 서로 다른 두 사람이지만 그들은 적어도 하나의 가치를 공유하고 있었다. 두 사람은 각기 일반인들의 생각이 미치지 않는 독창적인 방법으로 폭력 없는 사회를 실현하기 위해 노력하고 있었다. 그들이 만난 것은 2013년 여름, 네덜란드 헤이그 시청이었다. 그곳에서 잉그리드 롤레마가 제작한 베르타 폰 주트너(Bertha von Suttner: 1843-1914) 흉상의 제막식이 거행되었다. 주트너는 평화궁(現 국제사법재판소) 창설 100주년을 기념하여 그녀의 공로가 인정되어 평화활동가로서 표창되었다. 당시 보헤미아라고 불리던 곳에서 태어난 주트너는 확고한 평화주의자로 자라났다. 그리고 수 많은 기고와 강연을 통하여 열정적으로 평화를 호소했다. 1989년 그녀는 독일어로 『무기를 내려놓아라!』라는 소설을 발표하고, 이 책은 후일 15개 국어로 번역되어 주트너는 1905년 노벨 평화상을 수상하게 된다.

고마츠아키오와 잉그리드 롤레마는 기업가와 예술가로서 높은 평가를 받는 한편, 또한 평화사업가로 불리며 평화대사로서도 정열적으로 활동하여 관련서적 출판이나 강연회를 통하여 헌신적인 활동을 이어오고 있다. 고마츠아키오가 이끄는 인간자연과학연구소는 동아시아의 평화와 화해의 발전에 초점을 맞추고, 특히, 제 2차 세계대전 중 일본의 침략에 의해 중국과 한국에서 희생당한 사람들을 위한 일에 전념하고 있다.

롤레마는 「개인적 격려를 위한 네덜란드 사무소 (Holland Office for Personal Encouragement: HOPE)」의 공동창립자겸 프로젝트 멤버로서 활동하고 있다. 이 단체는 가자 지구에서 전쟁의 트라우마와 장애를 가진 팔레스타인 어린이들에게 예술과 문화 활동을 통하여 삶의 의미를 재발견 할 수 있도록 도와주는 역할을 하고 있다.

첫 만남 이후 롤레마와 고마츠는 공통의 이념을 바탕으로 우정을 키워왔다. 2014년 11월, 롤레마는 이 일본인 친구가 그 동안 이어온 평화를 위한 활동에 대한 감사의 뜻을 담아 한 통의 편지를 썼다. 그 편지는 『꿈을 믿지 않는 사람은 진정한 현실주의자가 아니다.』라는 소책자 형식으로 발표되었다. 그리고 이번에 이 책이 새롭게 출판되게 된 것이다. 이 책자는 이전에 기술된 롤레마씨의 글에 대해 고마츠아키오가 쓴 개인적 답장을 소개하는 형식을 가지고 있다. 그러나 나

는 고마츠의 답장에 굳이 나의 감상을 덧붙이기로 했다. 그것은 고마츠씨의 사상과 행동이, 그의 고향 일본의 물의 도시, 마츠에시(松江市)의 풍경 및 자연과 무척이나 닮았다는 것을 깨달았기 때문이다.

¹ 펠릭스 빌라누바 (Felix Villanueva) : 네덜란드의 비평가.



ウィーン平和博物館付近の小松氏とロレマ氏。小松氏に平和大使の称号が授与される
Akio Komatsu and Ingrid Rollema near the Peace Mueum Vienna. Komatsu has been named Ambassador of Peace

「和의 문화」 창조를 향하여

친애하는 잉그리드 롤레마씨에게

2014년 11월 23일, 일본의 마츠에시에서 열린 고마츠전기산업주식회사 주최의 심포지엄 「이즈모(出雲)로부터 태양이 떠오른다」에서는 롤레마씨와 당신의 친구 마리안느씨로 인해 많은 추억을 만들 수 있었던 것에 감사 드립니다. 롤레마씨의 예술을 통한 평화활동으로 말미암은 정열에 넘치는 강연과, 평화궁 건립 100주년을 기념하여, 카네기재단의 의뢰로 제작한 베르타 폰 주트너 동상 제1호, 비엔나의 제2호 동상에 이어, 지난 심포지엄에 맞춰 만들어진 제3호 동상의 제작에 600여명의 참가자들은 완전히 매료되었습니다.

롤레마씨로부터 받은 두 개의 선물은 매우 감동적이었습니다. 배포된 600여부의 책자에 소개된 소설 『무기를 내려놓아라!』로 100여년 전에 이미 이후에 다가올 전쟁의 참담함을 경고한 여성최초의 노벨 평화상 수상자 베르타 폰 주트너의 용기 있는 활동을 알게 해주었고, 때마침 말랄라유사프자이의 평화상 수상과 함께 참가자들은 지금 이 시대를 더욱 진지하게 고찰하게 하는 계기가 되었습니다.

또, 당신의 글이 일본어, 중국어, 한국어, 영어 등 4개국어로 번역된 것을 보고, 이전에 증정했던 「4개국어 중국고전명언록」의 의도를 이해하신 것이라 생각되어 매우 기뻐했습니다.

당신이 심포지엄 참석에 앞서 방문했던 한국의 판문점과 안중근의사 기념관은 120년에 걸쳐 대립하고 있는 북동아시아의 상징적 현장입니다.

The Theatre of Wrong Decisions(극: 잘못된 판단)의 영상과, 당신이 보내주신 분쟁이 이어지고 있는 팔레스타인 가자 지구에서 그림을 그리는 난민 어린이들의 웃는 얼굴을 사진으로 보고, 예술을 통하여 전화위복을 이루어낼 수 있도록 인재로 육성하고 있는 모습에 감동했습니다.

당신으로부터의 또 하나의 선물은, 동경에서 헤어질 때 받은 크고 검은 조개에 들어있는 스노우드롭의 작은 꽃씨였습니다. 스노우드롭은 겨울의 긴 추위를 견디고, 눈 속에서 싹을 틔워, 「봄을 전하는 희망을 의미하는 꽃」이라고 들었습니다.

당신이 마쓰에시의 전통 과자점 「彩雲堂」에서 열린 전통공예과자와 수지점토작품전을 방문했던 것이 인연이 되어 코가다카아키씨(古賀隆昭)와 그 부인 미사코(古賀操子)씨에 의해 수지점토로 스노우드

롭이 만들어졌으며 「메다까 논어(めだか論語)」에 참가하는 여성들이 중심이 되어 그 꽃의 재배를 시작했습니다. (번역자주: 메다까는 송사리의 일본어, 맑은 냇물에서만 산다는 민물고기로 논어공부로 깨끗한 정신을 만들어 낸다는 의미)

스위스의 알프스를 원류로 하는 “悠久의 河”라인 강 하구에 위치한 네덜란드의 점토로 만들어지는 당신의 작품은 유럽의 자연과 역사를 바탕으로 평화에의 강한 염원을 표현하고 있다고 들었습니다. 저는 이즈모(出雲)의 지원자들과 함께 일본 문화의 발상지라고 일컬어지는 고향, “悠久의 河” 이우강(意宇川) 강변(출정병사를 배웅했던 장소)에 중일전쟁의 격전지 중국 산둥성에서 제작한 스토야헤이웅(周藤彌兵)의 동상을 건립하였습니다. 그 곳에 스노우드롭의 화단을 만들 구상의 실현과 스토야헤이웅의 일생을 그린 쓰인 소설, 『悠久의 河』 무라오야스코(村尾靖子著)의 일어와 영어 2개 국어 출판과 보급활동이 진행되고 있습니다. 동양과 서양, 전통과 현대, 롤레마씨의 사랑(愛)과 이즈모의(和)가 하모니를 이룬 프로젝트가 진행되고 있습니다.

오늘날, 중국, 러시아, 미국 등, 핵 대국의 긴장이 계속되는 세계정세 속에서 극동의 일본열도와 한반도는, 강대국간의 긴장이 이어지던 유럽에서 영세중립국 스위스가 탄생할 당시와 같은 상황에 놓여있다고 생각합니다.

「역사를 배우고 가설을 세워서 시행착오를 반복하는 과정에서 더 나은 아이디어가 생긴다는 것을 믿고, 그것을 형상화 하는 것이 예술의 본질이다」라는 당신의 생각과 「어떤 일이 있어도 사람을 미워해서는 안 된다」라고 한 당신 부친의 가르침은 사회문제로부터 비즈니스 아이템을 만들어내고 시장을 창조해온 나의 경영과 공명하여 깊은 감명을 받았습니다. 150년 전 그리스로부터 미국을 거쳐 일본의 이즈모에서 결혼하고 「오픈 마인드」를 제창한 고이즈미야쿠모(小泉八雲, 라프카디오헌)와 400년전 貴國과의 인연을 이은 日光東照宮의 회전동릉, 그리고 당신의 말과 작품이 나의 뇌리 속에서 연결되어 대립과 통합, 발전으로 이끄는 「새로운 和의 文化의 창조」의 사명감을 재인식 시켜주셨습니다.

人間自然科学研究所
小松電機産業株式会社
代表 小松昭夫(고마츠아키오)



ズットナーがウィーン平和博物館に到着
The statue of Bertha von Suttner arriving in Vienna

고마츠아키오는 1988년 인간자연과학연구소의 전신인 「知革塾」의 설립과 1993년 스토야에이옹의 소설집필(코에키바오사무: 交易場修)을 시작으로 1999년에는 평화사업구상서 『太陽의 나라 IZUMO』를 발간, 세계의 전쟁기념관을 공식방문하며, 역사에서 배우고 미래를 개척하는 연구소활동을 본격화했다.

2014년에 건립된 스토야헤이옹 동상의 안내판에는 이즈모신화(出雲神話)의 「和讓」 정신을 현대에 되살려 인류의 「중전」에 이끌어내기 위하여 세 사람의 선인의 명언을 기록하였다.

「역사에 맹목인 인간은 현재에 대해서도 맹목이다」-리하르트 폰 바 이츠제커(1920-2015: 독일연방공화국 전대통령).

「이념 없는 경제는 범죄, 경제 없는 이념은 허언」, 일가를 폐하여 만가를 일으킨다」-니노미야손토쿠(1787-1856: 일본 에도 시대의 농정가이자 사상가).

「청춘은 인생의 어떤 시기를 말하는 것이 아니라 마음가짐을 말하는 것이다. 우수한 창조력, 강인한 의지, 불타오르는 정열, 안이함을 뿌리치는 모험심, 이런 모습을 청춘이라고 하는 것이다. -사무엘 울만(1840-1924: 미국의 시인, 실업가, 인도주의자).

바위보다 물

펠릭스 빌라누바

시간은 강물처럼 흘러간다 —孔子

러시아 태생으로 미국으로 귀화한 시인 조세프 브로드스키¹ (Joseph Brodsky) 1940-1996)의 유명한 에세이 『Watermark』는 다소 멜랑콜리한 감정을 동반한 베니스에 대한 그의 사랑의 선언서이다. 베니스는 물의 도시라고 일컬어지는 만큼 물에 그 본질은 끊임없이 변화하는 물을 반영하고 있다. 그는 이 책에서 「神은 時間이다」라고 하는 주목할 만한 개념을 표명했다. “나는 늘 神은 時間이 아닐까 하는 생각에 사로잡혀있었다. 적어도 神의 精神은 時間이 아닐까? 어쩌면 이것은 나 혼자만의 독자적인 사고였다고 할 수도 있겠지만 꼭 그렇다고만 단언할 수는 없을 것이다. 어찌되었든 만일 神의 精神이 수면 위에 나타난다면 물은 틀림없이 그것을 반영할 것이라고 생각했다.”²

발트 해변에서 자란 브로드스키는 성서에 적혀있는 신이라는 말을 고정적인 개념으로 받아들이지 않고, 무색투명하고 민첩하며 또한 유동성을 겸비한 요소라고 생각했다. 확실히 물은, 시간과 같이 멈출 줄을 모른다. 시간은 물처럼 흘러 모든 인간의 생각이나 행위도, 역사속의 선과 악도, 그 흐름 속에 삼켜버리고 만다. 한정된 생명만을 가진 우리 인간은 누구도 그 흐름에 저항할 수 없는 것이다. 그러나 모든 것을 포함하는 시간 -브로드스키는 이것을 물이 반사하는 신이라고 생각-에 대한 인간의 끝없는 도전이야말로 우리 존재의 이유라고 말하고 있다.

네덜란드의 철학자이자 작가인 르네 텐 보스는 최근의 저서 『물 : 지리철학의 역사』에서 다음과 같이 말하고 있다. 인간의 어떠한 사고의 원천이 되는 것은 단순히 주체와 객체의 관계로만 귀결시킬 것이 아니라, 그러한 생각을 하게 된 구체적 환경이 가진 무언의 역할에 대해서도 고찰하지 않으면 안 된다는 것이다.

「풍경, 환경 또는 공간이라는 것은, 인간을 뺀 단순한 물리적 물질적 현상으로서 고찰되어서는 안 된다. 인간정신의 영향과 관련하여 그 역할을 보는 시점이 필요하다.»³

예를 들면, 텐 포스는 하천적 정신과 해양적 정신은 철학적 개념을 달리 한다고 주장한다. 하천에 둘러싸여 하천적 정신을 가진 철학자들

예를 들면 그리스의 헤라클레이토스가 있다. 「만물은 흘러간다. 멈추는 것은 아무것도 없다」는 그의 명언으로서 잘 알려져 있고 오늘날에도 그 가치는 사라지지 않고 있다. 해변에서 자란 해양적 정신을 가진 철학자의 예로서는 헤라클레이토스와 같이 소크라테스 이전의 철학자인 밀레토스(학파)의 탈레스가 있다. 그는 만물의 근원은 물이며, 모든 것은 물로부터 생성된다고 생각했다. 물의 도시 베니스의 광경이 유아기부터의 발트해의 풍경과 더불어 조세프 브로드스키의 심상 풍경을 형성하고 神과 時間 그리고 물에 관한 독자적인 사상을 만들어 내고, 결국은 그 곳에 묻히길 바라게 하였을 가능성은 매우 높다.

마츠에시(松江市)는, 일본의 남서에 위치한 시마네현의 동북에 있는 일본의 해안도시다. 그 독특한 지리적 위치로 인해 「동양의 베니스라고」 불리기도 한다. 시의 북쪽에는 일본해와 신지호, 중해를 건너 시마네반도가 있어 바다로부터 보호받을 수 있는 지형을 갖추고 있다. 오하시가와(大橋川)는 기수호(汽水湖)인 서쪽의 신지호로부터 동쪽의 중해로 도시를 가로질러 흐르며, 만조시에는 바닷물이 유입된다.

사업가인 동시에 평화대사이기도 한 고마츠아키오씨는, 일본 건국 발상지의 하나라고 하는 마츠에시 야쿠모초(八雲町)에서 태어났다. 시마네현의 농기구 제조사에서 근무, 농업기계의 연구개발에 종사한 후, 회사의 도산을 계기로 「悠久의 강」 이우천(意宇川) 주변에 있는 생가의 창고에서 사업을 일으켰다.

50대가 되어 시마네반도 건너편의 한반도와 유라시아대륙을 향하는 신지호 근처에 본사를 건설하고 이전했다. 그 곳은 아름다운 경관과 함께 최근에 많은 온천이 나오고 있는 대자연의 은혜에 충만한 훌륭한 입지조건이다.

인류 진화를 위한 공감의 플랫폼을 준비하고 소위 「和의文化」의 창출을 계획한 고마츠의 아이디어의 대다수는, 그의 마음속에 흐르고 있는 고향의 강에 기인하고 발전되어 왔는지도 모른다. 이우천의 강물과 신지호의 잔잔한 물결이 그의 뇌리에 반사하여 뇌의 진화에 영향을

끼쳤을 가능성도 있지 않을까?

고마츠전기산업주식회사의 대표로서, 또한 인간자연과학연구소의 이사장으로서의 고마츠가 물로부터 영감과 힌트를 얻었다고 생각하는 것은 그리 놀라운 일이 아니다. 사업에 있어서는, 세계에서 가장 앞선 디지털 종합물관리시스템을 개발하여, 야쿠모(八雲)의 물의 神, 야쿠모수신 「やくも水神」이라고 명명하였다.

고마츠의 강연이나 인터뷰의 중요한 테마는 물에 관한 세계적인 긴급과제와 그 책임이라던가, 전 인류가 공유하지 않으면 안 되는 것들이다. 이러한 강연 때 그는 공자와 맹자, 그리고 노자 등 고대 중국 현자의 격언과 비유를 자주 인용한다.⁴

1994년, 고마츠는 인간자연과학연구소(HNS)를 설립하고, 그의 고향의 물과 관련된 역사를 알리기 위해 「一村一志運動」을 전개했다. 이 운동의 하나가 고향의 치수에 관련된 위인들의 위업을 전기소설, 아동 문학, 만화, 심포지엄 등 다양한 형태를 통해 널리 알리는 일이었다. 2015년에 이르러는 전후 70주년을 기념하여 무라오야스코씨(村尾靖子)의 소설 『悠久의 강 : 스토야헤이周藤彌兵衛 이야기』을 일본어와 영어가 함께 표시된 그림책으로 출판하여 세상에 알렸다. 스토야헤이옹은 17세기부터 18세기에 걸쳐서 살았던, 신지호 주변에 위치한 히요시 마을(日吉村:현재 마츠에시의 일부)의 촌장이었다.

이우천은, 평소에는 히요시 마을을 흐르며 풍요로운 혜택을 주는 평화로운 강이었다. 그러나 마을입구에 이르면 강물의 흐름이 찌루기산(剣山:이 세상과 저 세상의 경계에 솟아있는 산이라는 성스러운 산으로 여겨짐)과 부딪쳐 강물이 산을 끼고 우회하여 돌아가는 지형을 하고 있었다. 어쩌다 호우를 만나면 이 산이 강물의 흐름을 가로막아 주변을 한 번에 삼키는 대홍수의 원인이 되곤 했다. 대량의 강물이 넘쳐 제방이 터져 무너졌다. 집은 파괴되고 사람들은 익사하는 등, 마을전체가 홍수에 쓸려 내려가 버리고 마는 것이었다.

겨우 살아남은 마을 사람들의 얼굴을 보았을 때 56세의 스토야헤이옹은 결심했다. 자신의 생애를 걸고 어떻게 해서든 이 문제를 해결하

겠다고. 「자신의 행복보다 마을사람의 행복이 먼저다.」 그는 강의 흐름을 바꾸기 위해 쇠망치와 정을 손에 쥐고 바위산으로 향했다. 그 사업을 마쳤을 때 그는 97세가 되어 있었고 드디어 히요시마을은 홍수의 위협으로부터 벗어나게 되었다. 그로부터 5년 후 그는 편안히 숨을 거두었다.

공동체의 행복을 바라며, 자신의 生の 절반을 강의 흐름을 바꾸는 것에 쓴 한 남자의 이야기는, 참을성, 인내, 불굴의 정신, 공감을 나타내는 상징적 비유로서 읽혀지기도 한다. 스토야헤이옹의 불굴의 정신과, 자신의 더 큰 고통으로 마을 사람들을 살리고자 한, 바위와 같은 굳은 결의를 보건대, 그는 참된 이상주의자이자 또한 낙관주의자라는 것을 잘 알 수 있다.

고마츠아키오는, 세계 평화와 화해를 위해서 그의 진심과 혼을 쏟아 노력하고 있다. 혁신의 기개가 넘치는 기업의 대표로도 바쁜 가운데, 국제분업⁵, 핵 확산, 스마트폰시대를 매개체로 활용하여 세계 평화의 구현화에 필요한 포석을 두고자 많은 나라를 방문하고 있다. 핵보유국의 단계적인 핵 삭감 프로세스로 세계 각국이 평화 공존할 수 있는 날이 올 것을 결코 의심하지 않는다. 평화를 향한 출발점의 하나는, 중국, 러시아, 미국 등 삼대 핵 대국의 세력이 팽팽히 맞서고 있는 한반도의 맞은편에 위치한 일본의 이즈모(出雲)이다. 고마츠의 눈은 이즈모로부터 한반도와 일본열도에 비핵화의 확실한 조류가 시작되는 것을 지켜보고 있는 것이다.

고마츠아키오는 자신의 사명이라고 생각하는 곳으로 사람들의 관심을 모으기 위해 정치가들이 취하는 것과 같은 정치적 전략은 사용하지 않는다. 그것이 아니라 물의 흐름과 같이 논리적이고 비공식적인 민간외교라고 불리울 온화한 길을 걸어 목적을 향한다. 그것은 왜일까? 기원전 6세기의 중국 철학자 노자는 다음과 같이 말하고 있다. **“천하에 물과 같이 유약한 것은 없다. 그러나 견고한 것을 공격하기에 이를 앞서는 것은 없다”⁶**

- 1 조세프 브로드스키 (Joseph Brodsky): 1940년생, 당시 레닌그라드 라고 불린 상테페테르부르크에서 태어났다. 몇 번이나 시베리아도 추방되었다가 후일 미국으로 건너가 그곳에서 여생을 보냈다. 전후 러시아의 가장 영향력 있는 시인으로서, 1987년 노벨 문학상 수상. 1996년 심장마비로 사망 후 베니스근 처 산 미켈레섬에 매장되었다.
- 2 조세프 브로드스키 著, *Watermark*, Farrar, Straus and Giroux Inc., New York 1992. 41p.
- 3 르네·텐·보스: 著 『물 : 지리철학의 역사』, 암스테르담, 2014年, 14p.
- 4 노자가 창시한 도가철학에 의하면, 최고의 선이란 물과 같다고 한다. 물은 일상생활에 있어 겸양, 적응성, 인내 오픈 마인드 등의 미덕을 나타내는 이미지로서 사용되고 있다.
- 5 국제분업: 경제학에서 말하는 (노동)의 국제분업」이란, 각국이 각각 자신 있어하는 생산부문에 특화 해나가는 것을 말한다. 그 결과 다양한 경제활동이 세계적 규모로 전개될 수 있도록 한다. 이 분업의 글로벌화를 나타내는 전문 용어로서 「노동의 新국제분업」이라는 용어가 만들어졌다. 이러한 흐름 속에서 공업기술은 선진자본주의 국으로부터 개발도상국으로 이전된다.
- 6 老子道德經 78章.



悠久の河の岸边に立つロレマ、小松両氏
Ingrid Rollema and Akio Komatsu near the Eternal River in Matsue



松江国際シンポジウム会場で除幕を待つズットナー像
Sculpture of Bertha von Suttner on the Matsue conference

前言

菲利克斯 维拉纽瓦¹

这本书出自一个相遇。即日本的事业家小松昭夫与荷兰的雕刻家英格丽德·劳莱玛的相遇。二位虽然生长于不同的大陆和文化环境,但至少共享着一个价值观。用别人考虑不到的独特方法,为实现没有暴力的社会而持续努力着。他们于2013年夏天,在荷兰海牙市政厅第一次相逢。在那里,英格丽德·劳莱玛制作的贝尔塔·冯·苏特纳(1843-1914)的青铜胸像揭幕式被举行。苏特纳,是作为和平运动家被众所周知,在和平宫创办100周年纪念仪式上被表彰。出生于当时被称为波西米亚地区的苏特纳,成长为坚强的和平主义者。她通过很多报道和讲演,积极热情地向人们呼吁和平。1889年,以德语出版小说《扔掉武器!》,之后被翻译成15种语言。1905年获诺贝尔和平奖。

小松昭夫和英格丽德·劳莱玛,各自分别作为企业家和艺术家得到高度评价。在此基础上,又作为和平事业家及和平大使,大力开展活动,通过出版物和讲演等发言,如字面所述一直坚持着狂热的献身活动。前者,小松昭夫财团法人(基金会)人间自然科学研究所(HNS)理事长,主要以东亚地区的和平与和解为中心,特别是集中精力为第二次世界大战中,由日本侵略造成的中国和韩国的牺牲者开展活动。

后者,劳莱玛,作为“为激励个人的荷兰事务所”(Holland Office for Personal Encouragement: HOPE)的共同成立发起人兼职员开展活动。在加沙地带,通过美术和文化活动,帮助遭受心灵创伤和障碍痛苦的孩子们重新寻找有意义的生活。从第一次相遇起,劳莱玛和小松就以志趣相投结缘建立起深厚的友谊。日本友人为和平事业倾注着精力,为了表示感谢,劳莱玛于2014年11月写了一封信。那封信以“不相信梦想的人,就不是现实主义者”为题的小册子形式被发表。此次这个小册子重新得到出版。采取小松对前述小册子回信的形式。但除了小松昭夫给英格丽德·劳莱玛的回信之外,我试着大胆地投了此稿。这是因为我得知小松的思想和行动,是如何地被他的故乡,日本的水都松江市的风景所隐喻交织。

菲利克斯 维拉纽瓦¹ (Felix Villanueva): 荷兰评论家。



创造“和文化”

亲爱的英格丽德 劳雷玛 (Ingrid Rollema) 女士

您好。2014年11月23日，小松电机产业株式会社在日本松江市主办的“阳光从出云升起”的研讨会上，劳雷玛女士和友人玛丽安 (Marianne) 女士，为我们留下许多美好的回忆，非常感谢。劳雷玛女士出自通过艺术开展和平活动的充满热情洋溢的讲演，以及受卡内基基金会委托为纪念和平宫100周年，创作的贝尔塔·冯·苏特纳雕塑的第一号，继维也纳的第二号后为本次研讨会揭幕式特意创作的第三号，震撼了600多名与会者的心扉。

我对劳雷玛女士的两件礼物深受感动。您发给与会者的600份小册子，让大家对100年前的女性第一位获诺贝尔和平奖的贝尔塔·冯·苏特纳，以小说《放下武器！》警告人们战争残酷性的勇敢活动有了一定了解。同时，与最近获诺贝尔和平奖的玛拉拉重叠相映，成为与会者认真思考当今时代的一个楔机。

此外，看到您的文章被翻译成中韩日英四国语言，得知您对我送给您的“四国语《中国古典名言录》”的意图完全理解，感到非常高兴。

您在参加此次研讨会的途中，特意途经韩国访问的韩国“板门店”，“安重根义士纪念馆”，是冲突持续120年的东北亚地域的象征性的现场。

您的The Theatre of Wrong Decisions (错误决断之剧) 录像，以及看到您寄来的纠纷地带的加沙地区的难民孩子们画画的神采奕奕的照片，可感到这些孩子们作为可转祸为福的人才正在通过艺术茁壮成长，让我深受感动。

您的另一个礼物，是在东京告别时得到的、被装在一个黑色大贝壳里的雪花莲的小球根。据说雪花莲，在漫长的严冬里，不畏严寒发芽开花，有“报春赋予希望之花”之含义。托您参观松江老字号糕点店“彩云堂”举办的传统工艺糕点和树脂粘土艺术作品展的福，由古贺隆昭·操子夫妇创作的树脂粘土雪花莲作品得以诞生，以“青鳞鱼

论语学习班”的女士们为中心的雪花莲的栽培已经开始。

由地处源于瑞士阿尔卑斯山的“悠久之河”莱茵河口的荷兰粘土诞生的您的作品，表达着从正面接受欧洲的自然与历史，和您对和平的强烈愿望。在被称为日本文化发祥地的我的故乡的“悠久之河”意字河的河畔，这里亦是战时送年轻人上战场的地方。与出云当地的有关民间团体一起，建立了在日中战争激战地的中国山东省制作的治水伟人周藤弥兵卫翁像。在该像附近建设雪花莲花坛构想的实现，以及今秋出版的描写周藤弥兵卫翁一生的日英两国文字的小说《悠久之河》(村尾靖子著)的普及活动正在推行中。东方与西方，传统与现代，劳雷玛女士的“爱”和出云的“和”的和谐项目正在运作中。

在中国，俄罗斯，美国的核大国的紧张关系持续的世界局势中的今天，我觉得远东的日本列岛和朝鲜半岛所处的状况，与当年在大国间处于紧张关系中的欧洲诞生的永久中立国瑞士当时的状况很类似。

劳雷玛女士的“向历史学习，先作一个假设相信在经过反复创作中会产生灵感，把其灵感用一种形式表达出来即艺术本质”的观点，以及您父亲的“既是发生什么样的事也不要憎恨怨人”的教育，与我以社会问题为商材，创造了新产业市场的思维方式产生共鸣，使我非常感动。150年前从希腊经美国来到日本出云，结婚定居，提倡开放心态的文坛小泉八云 (Lafcadio Hearn)，与400年前与贵国结缘的日光东照宫的回转灯笼，以及您的语言与作品等，在我的脑海中连在一起，产生共识平台，让我对我构想的从对立向整合·发展方向引导的“和文化”创造的这一使命，重新得以进一步的认识。

人間自然科学研究所
小松電機産業株式会社
代表 小松昭夫



韓国と北朝鮮との非武装地帯板門店を訪れたイングリッド・ロレマ氏
Ingrid in Panmunjom, a village in the demilitarized zone between North and South Korea

小松昭夫，于1988年设立人间自然科学研究所的前身“知革塾”。1993年由交易场先生执笔编著《周藤弥兵卫》小说为契机，于1999年发行了和平事业构想书《太阳之国出云》，正式开始了访问世界战争和平纪念馆，学习历史，开创未来的研究所的活动。

在2014年建立的周藤弥兵卫铜像的看板说明文中，为了让出云神话的“和让”精神复苏于现代，诞生人类“终战”潮流，记载了以下三位先辈的名言。

“对历史盲目的人，对现在也盲目。” — 里夏德·冯·魏茨泽克 (1920-2015: 第六任德国联邦总统)。

“没有理念的经济是犯罪，没有经济的理念是戏言。废一家，兴万家。” — 二宫尊德 (1787-1856: 日本江户时代的农政家 思想家)。

“青春不是年华，而是心境。是优秀的创造力，坚强的意志，炽热的感情，丢弃安逸的冒险心，这种状态称为青春。” — 塞缪尔·厄尔曼 (1840-1924: 美国诗人，实业家，人道主义者)。

水的威力强于岩石

菲利克斯·维拉纽瓦

时间如河水流逝 孔子

俄罗斯出生的美国籍诗人约瑟夫·布罗茨基(Joseph Brodsky 1940~1996)的名著《水位标》¹，是他稍伴有伤感的对威尼斯的爱的宣言书。威尼斯正因为被认为是水的都城，其本质反映着经常变化的水。他在那本书中叙述道：“时间是神”这一值得关注的想法。“我一直坚持一种观念，认为神是时间，或至少神的灵魂是时间。我想这是我独自的看法，并不能那么清楚地断言。我认为，无论怎样，如果一旦神灵出现在水面，水一定是会反映出。”²

在波罗海边长大的布罗茨基，对圣经中的神的词汇不视为一个固定的概念，认为是具备敏捷性和流动性的无色透明元素。水，确实如同时间不知在哪里停止。时间如流水，所有人的思维，行为，历史中的善与恶，都会被其流水所吞没。其流水对于我们生命有限的人类来说，是无法抗拒的。然而，对于涵盖所有东西的时间—布罗茨基把时间认为水反映的神—，人的无尽挑战，也许可以说正是我们存在的理由。荷兰的哲学家，同时又是作家的勒内·腾·波苏在他的新书《水：地理哲学史》中是这么说的。即，一个本来的想法，不只是旨在被归因于主体与客体之间的关系，有必要考察其中产生的想法在特定环境中发挥的无语的作用。“景观，环境或空间，不应该仅仅作为单纯的物理性和物质现象，脱离人的因素。有必要从人的精神效应相关看待其作用。”²

腾·波苏主张，河川精神和海洋精神具有不同的哲学概念。作为被河流环绕，具有河流精神的哲学家，有希腊的赫拉克利特。他的名言“万物流转，什么都留不住”，为众所周知，至今不失其价值。

作为海边长大，拥有海洋精神的哲学家，与赫拉克利特相同的苏格拉底以前的哲学家，有古希腊米利都学派的创始人，泰勒斯。他认为水是万物之源，所有的一切都由水生成。不难想象，约瑟夫·布罗茨基幼儿期看到的波罗海的风光与水都威尼斯的景象互相结合，形成了他的印象风景，产生有关神，时间，水有关的独自思想，以至产生希望被葬于此地的愿望。

松江市，是位于本州岛西南方向的岛根县东北的日本海沿岸城

市。那个赋予独特的地理位置，有被称为“东洋的威尼斯”之美称。城市北侧有日本海和被宍道湖·中海湖相隔的岛根半岛，呈被大海保护的形状。大桥川，与宍道湖同属半淡水，自宍道湖向东穿过市区经中海湖流入日本海。

是事业家同时也是和平大使的小松昭夫，出生于被称为日本的发祥地之一，松江市八云町。在岛根县内的农机制造厂，继农业机械研究开发工作之后，以该公司倒闭为契机，在“悠久之河”的意宇川河畔的老家的库房起家创办事业。

步入50岁，他在岛根半岛对面的面向朝鲜半岛，欧亚大陆的宍道湖畔建设了新事业所。其明媚的景观，再添加附近的多处温泉，是一个充满大自然恩惠的好立地。为准备人类进化的共识平台，力图创造“和文化”的小松的种种创意，也许是由流过小松心灵的无数的故乡的水流发展而来。有可能是意宇川的水流，宍道湖荡起的涟漪让他的脑海得以进化。

小松电机产业株式会社的社长，人间自然科学研究所的理事长的小松，认为他是由于水得到了灵感或启示并不感到惊讶。公司开发的世界最先进的云计算水综合管理系统，从八云的水之神命名为“八云水神”。

小松的讲演和采访中的重要主题之一，是有关水的世界性紧急课题和其责任，必须让全人类共享。叙述这些自我主张的时候，经常引用孔子，孟子，还有老子等古代中国的圣贤哲人的格言和比喻。⁴

1994年，小松创立人间自然科学研究所(HNS)，为表达他对有关他故乡的水的历史的重视，展开了“一村一志运动”。这个运动之一，以传记小说，儿童文学，漫画，讨论会等各种各样的形式，表彰故乡关于治水伟人们的业绩。以至2015年，在纪念战后70周年之际，推进村尾靖子小说作品《悠久之河 周藤弥兵卫翁的故事》问世。这本书以优美的日语和英文对译的画书形式被出版。周藤弥兵卫是17世纪到18世纪的位于宍湖畔的日吉村的村长。日吉村的现在，是松江市八云町的一部分。

意宇川，平常是流过日吉村，给两岸村民带来恩惠富裕的平和之河。河水在流经村子时，水流与圣山的剑山相撞而绕山迂回。所谓剑山，被置信为耸立于人间与黄泉境界的山。一旦遭受暴雨，剑山就会堵住河流，附近积水成为引发大洪水的根源。大量的水从河中溢出河堤防御溃决。房屋被毁坏，村民被夺去生命，如字面所述全村被洪水冲没。

看到勉强生存下来的村民们的痛苦表情，56岁的弥兵卫做出决断。决心豁出毕生精力治理这座山。他说“村民们的幸福就是自己的幸福。”手持铁锤和凿子，为改变河水流向，奔向岩石山。于是，日吉村从洪水危险中被解救。这项事业结束时，他97岁，5年后安详离世。

祝愿大家的幸福，为改变河水流向奉献出人生一大半的一个男子汉的故事，可看到对于耐心，忍耐，不屈不挠精神达到共识的想象性比喻表现方式。即，从周藤弥兵卫发扬不屈不挠精神，把村民从巨大痛苦中解救出来的这如同岩石般地坚强决心来看，可看得出他是一位真正的理想主义者，并且是一名乐观主义者。

小松昭夫，为了世界的和平与和解，为了世界文化的发展，倾注其真心和整个灵魂，以地球规模在努力着。作为富有进取气概的公司经营者在极度繁忙中，灵活发挥国际分工⁵，核扩散，智能手机时代的效应，为实现目标打好布局坚持访问需多国家开展交流。在核武器拥有国的阶段性核削减的经过中，他对世界各国的和平共处是深信无疑的。通向和平的起点之一，即位于中国，俄罗斯，美国这三大核大国的力量对持的朝鲜半岛对岸的日本出云。在小松的眼里，映出的是朝鲜半岛和日本列岛的非核武器化的潮流，将从出云之地发起。

小松昭夫，为了在作为自己使命的地方向人们呼吁关心，不取像政治家那样的强行性政治战略。相反，像水的流动那样合乎逻辑，以被称为非正式的民间外交，稳健地实现目标。为什么呢？纪元前6世纪的中国的哲人老子如下所述：“天下莫柔弱于水。而攻坚强者、莫之能胜。”⁶

经济学中的“（劳动的）国际分工”，是指各国分别对得意的生产部门进行专业化。其结果，会出现世界规模的各种经济活动。作为表示国际化分工的专业用语诞生了“劳动的新国际分工”这个词。在其产业潮流中，工业技术从发达资本主义国家向发展中国家转移。

-
- ¹ 约瑟夫·布罗茨基，1940生出生于当时被称为列宁格勒的圣彼得堡。曾几度受到西伯利亚流放之后赴美永居。是战后俄罗斯最有影响力的诗人之一，1987年获得诺贝尔文学奖。1996年，因心脏麻痹猝死，葬于圣米歇尔岛附近的威尼斯。
 - ² 约瑟夫·布罗茨基著《水位标》，法勒，斯特劳斯和吉罗出版社（Farrar, Straus and Giroux Inc.），纽约，1992年。41页。
 - ³ 勒内·腾·波苏著《水：地理哲学史》，阿姆斯特丹（Amsterdam），2014年，14页。
 - ⁴ 据认为创始人的人生哲学道家的老子说，“上善若水”。水，在日常生活中被运用于以表达谦让，适应性，忍耐，敞开心怀等美德时的形象比喻。
 - ⁵ 经济学中的“（劳动的）国际分工”，是指各国分别对得意的生产部门进行专业化。其结果，会出现世界规模的各种经济活动。作为表示国际化分工的专业用语诞生了“劳动的新国际分工”这个词。在其产业潮流中，工业技术从发达资本主义国家向发展中国家转移。
 - ⁶ 老子道德经 78章。



板門店を訪れた人間自然科学研究所(HNS)のメンバー
Members of the HSN in the Joint Security Area 2010.3.27



小松昭夫
Akio Komatsu



小松千津
Chizu Komatsu



金美正
Mijeong Kim



交易場修
Osamu Kouekiba



岸本典久
Norihisa Kishimoto



中村新一郎



魏亞玲
Yaling Wei



小林泰久

Yasuhisa Kobayashi



村尾靖子

Yasuko Murao



堀江研次
Kenji Horie



佐藤京子
Kyouko Satou



早川 和弘

Kazuhiro Hayakawa



稲田幸子

Sachiko Inata



磯江公博

Kimihiro Isoe



人間自然科学研究所(HNS)メンバー
Yuushien Garden in Daikonshima Island in Matsue

Vorwort

Felix Villanueva¹

Diese Publikation ist auf eine zufällige Begegnung des japanischen Großindustriellen Akio Komatsu mit der niederländischen Bildhauerin Ingrid Rollema zurückzuführen die, obgleich sie unterschiedlichen Kontinenten und Kulturen entstammen, beide Menschen jedoch durch eine gleiche charakterliche Wesensart geprägt sind. Auf außergewöhnliche Art und Weise widmen sie sich dem Ziel eine gewaltlose Gesellschaft zu realisieren. Sie haben sich im Sommer des Jahres 2013 in den Niederlanden im Rathaus von Den Haag wo eine Bronzeskulptur der Friedenskämpferin Bertha von Suttner (1843-1914), hergestellt von Ingrid Rollema, anlässlich des hundertjährigen Jubiläums des Friedenspalastes Den Haag, enthüllt wurde, getroffen. Von Suttner stammte aus einer Gesellschaft, die man zu ihrer Zeit als bohemhaft oder auch unkonventionell bezeichnete. Sie ist in der Tat als Pazifistin zu sehen, die sich mit Ihren zahlreichen Artikeln und Vorträgen passioniert für den Friedenskampf einsetzte. Im Jahre 1989 wurde ihr Buch *Die Waffen Nieder!* in deutscher Sprache veröffentlicht und später in fünfzehn Sprachen übersetzt. 1905 wurde von Suttner mit dem Nobelpreis ausgezeichnet.

Akio Komatsu und Ingrid Rollema unterscheiden sich nicht nur in ihrer täglichen Berufskarriere, sondern auch in ihrem Einsatz als Botschafter für den Frieden und das ermöglicht es ihnen ihr Anliegen sowohl in Worte zu kleiden als auch mit Aktionen zu verdeutlichen. Der Ersterwähnte, Vorsitzender der Human, Nature & Science Research Institute Foundation (HNS) mit dem Fokus auf die Friedensförderung und auf die Wiederversöhnung der Menschen im östlichen Asien, die das Opfer der japanischen Aggression während des Zweiten Weltkrieges, vor allen Dingen in China und Korea, sind. Die Letztgenannte als Mitbegründerin und Mitglied der Projektmanufaktur der Holland Office for Personal Encouragement (HOPE) hilft im Gazastreifen, mit ihren Unterrichtsstunden auf dem Gebiet der Kunst und Kultur, dem Leben der traumatisierten und behinderten palästinensischen Kinder wieder Sinn und Bedeutung zu geben.

Seit ihrem ersten Treffen haben Ingrid Rollema und Akio Komatsu eine sehr enge Freundschaft, begründet in den Wurzeln ihrer geistesverwandten Ideale, geschlossen. In Anerkennung des Einsatzes für einen Frieden ihres japanischen Freundes, schrieb Rollema ihm 2014 einen persönlichen Brief, Auslöser für die Publizierung des Druckes *Wer nicht an Träume glaubt ist kein Realist*. Diese Ihnen jetzt vorliegende Publikation ist die Reaktion von Akio Komatsu auf die vorgenannte Broschüre. Abgesehen von seiner persönlichen Reaktion auf den Brief von Ingrid Rollema habe ich einen reflektierenden Text angefügt mit dem ich die Aktionen von Akio Komatsu metaphorisch eingewoben in die Wasserlandschaft der japanischen Stadt Matsue, seine Heimat Erde, widerspiegeln.

¹ Felix Villanueva ist niederländischer Publizist.



国際シンポジウム参加者に謝辞を述べる小松氏
Mr. Akio Komatsu thanking the speakers and the people attending the conference

Für die Verwirklichung der „Kultur der Harmonie“

Liebe Frau Ingrid Rollema,

Nochmals meinen besten Dank dass Sie den weiten Weg nach Matsue, Japan auf sich genommen haben um am 3. November 2014 an der internationalen Tagung „The Sunrise from Izumo“ teilzunehmen. Ich werde stets die wunderbaren Erinnerungen an Sie und Ihre liebe Freundin Frau Marianne Kleijwegt in Erinnerung behalten. In der Tat war ich von Ihrer leidenschaftlichen Rede, mit der Sie Ihren engagierten Einsatz für den Frieden und Ihre Arbeit als Künstlerin für die Friedensbewegung schilderten, tief beeindruckt. Gleichfalls war ich, wie auch 600 weitere Tagungsteilnehmer, von Ihrer Skulptur Bertha von Suttner (Nummer 3), die an dem Tage enthüllt wurde, beeindruckt und verzaubert. Sie haben bereits die erste Anfertigung dieser Skulptur anlässlich des 100-jährigen Jubiläums des Friedenspalastes in Den Haag und eine zweite für das Friedensmuseum in Wien erschaffen.

Es ist mir ein echtes Anliegen Ihnen gleichfalls mitzuteilen dass ich die zwei besonderen Geschenke die Sie mir während Ihres Besuchs gegeben haben außerordentlich wertschätze. Einerseits die 600 Exemplare Ihrer Broschüre die unter den Tagungsteilnehmern verteilt wurden, und andererseits die mir überbrachte Neuigkeit dass Malala Yousafzai (Anm.: 17, Muslimin, pakistanische Bildungsaktivistin) mit dem Friedensnobelpreis ausgezeichnet wurde, haben erheblich dazu beigetragen dass wir uns erneut mit dem jetzigen Zeitalter ernsthaft zu beschäftigen haben. Die Broschüre die die Friedensbemühungen der Bertha von Suttner wunderbar darstellt, und ihr Roman *Die Waffen Nieder!* der bereits vor 100 Jahren die Welt vor den verheerenden Auswirkungen der modernen Kriegsführung warnte, sollten uns ein Leitfaden sein.

Ich habe verstanden dass Ihre Broschüre in die chinesische, koreanische, japanische und englische Sprache übersetzt worden ist. Das Ihnen früher bereits übergebene Buch mit dem Titel *The Chinese Classic Quotations* (Die chinesischen klassischen Zitate) wurde ebenfalls in diese vier Sprachen übersetzt. Ich bin glücklich dass Sie meine Beweggründe dieses Buch in vier Sprachen zu veröffentlichen nachvollziehen konnten.

Auf Ihrer Reise nach Japan haben Sie die Stadt Panmunjom und das Ahn Jung-Geun Memorial Museum (Anm.: Gedenkstätte mit der Lebensgeschichte des Patrioten Ahn Jung-Geun und sein Kampf gegen die Japaner) in Südkorea besucht. Das sind in der Tat die zwei symbolischen Orte an denen die Konfrontationen in den vergangenen 120 Jahren nicht beendet werden konnten.

Nicht nur die Betrachtung des Videomitschnitts des „Theatre of Wrong Decisions“ (Theater der falschen Entscheidungen) sondern auch die Bilder aus Ihrem Kunstkurs mit lächelnden Flüchtlingskindern aus dem leidgeprüften, konflikteichen Gazastreifen, haben mich sehr beeindruckt. Sie helfen in der Tat dass die Kinder, dank künstlerischer Aktivitäten, ihr unglückliches Schicksal vergessen und einer besseren Zukunft entgegen sehen können.

Ihr anderes Geschenk waren die kleinen Schneeglöckchen-Zwiebeln in einer großen schwarzen Seemuschel, die Sie mir während Ihrer Verabschiedung in Tokio gaben. Sie erzählten mir dass Schneeglöckchen Blumen der Hoffnung sind und als erste Frühlingsboten auf den noch mit Schnee bedeckten Flächen blühen, nachdem ein langer, strenger Winter überstanden ist. Es wird Sie interessieren dass Herr Takaaki Koga und seine Frau Misako unmittelbar nach Ihrem Besuch in dem sehr alten Geschäft „Saiun-do“ in Matsue mit der Herstellung von Schneeglöckchen aus „resin-clay“ begonnen haben. Die Damen von „The Medaka-fish Analects Study Group“ (Anm.: Medaka-japanischer Reisfisch/Analecten oder Gespräche des Konfuzius) und einige andere Personen haben die Blumenzwiebeln bereits gepflanzt. Die Niederlande sind an der Mündung des ewigen Rheins gelegen. Dieser Fluss transportiert mit seinem Wasser von der Quelle in der Schweiz auf dem Weg in die Niederlande Ton aus mehreren europäischen Ländern bis in die Flussmündung wo er sie ablagert. Sie haben mir erzählt dass Ihre Kunstwerke aus niederländischem Ton hergestellt wurden die die europäische Natur, Geschichte und die Seele der Menschen widerspie-

geln. Die gleichen Gedanken haben mich zum Bau der Statue des Sutoh Yahee in der chinesischen Provinz Shandong, Szene der harten Kämpfe mit China während des Zweiten Weltkrieges, veranlasst und ich habe sie am Ufer des zeitlosen Flusses Iu im Distrikt Izumo-Yakumon, vermutlich der Ursprungsplatz der japanischen Kultur, errichten lassen. Zurzeit planen wir dort die Einrichtung eines Schneeglöckchen-Gartens. Vor kurzem hat die Autorin Frau Yasuko Murao ihr Buch *The Eternal River* (Der ewige Fluss) die Geschichte des Sutoh Yahee in japanischer und englischer Sprache veröffentlicht. Diese Vorhaben werden durch die gemeinsame Harmonie zwischen Ost und West, Tradition und Neuzeitlichkeit und durch die Liebe, die Sie und „Wa“ (Frieden und Harmonie) exemplifizieren, voran getrieben.

Das Japanische Inselmeer und die Halbinsel Korea liegen im geopolitischen Brennpunkt der fortwährenden internationalen Spannungen zwischen den drei Nuklear-Supermächten: China, Russland und den Vereinigten Staaten von Amerika. Ich denke die Situation gleicht der in der Schweiz bevor das Land die permanente Neutralität bekam. Sie erzählten dass Sie sich bemühen aus der Geschichte Lehren zu ziehen, an Ihren eigenen belastbaren Hypothesen arbeiten und mit „Versuchen und Fehlern“ Ihre Art und Weise der Inspiration zu finden und künstlerisch zu gestalten suchen. Sie nennen es das innerste Wesen Ihrer Kunst. Ich habe mit Freude festgestellt dass Ihr Gedankengang und die Philosophie Ihres Vaters niemals andere Menschen zu hassen, meinen Vorstellungen entspricht. Ich versuche meine Geschäftsmöglichkeiten vor dem Hintergrund sozialer Probleme zu finden und kreierte so neue Märkte für mein Geschäft. Das ist stets mein Geschäftsgebaren gewesen.

Lafcadio Hearn ¹, geboren in Griechenland, hat in Matsue gelebt und hat, nach einem Aufenthalt in Amerika, die Idee des „Open Mind“ vertreten. Diese beiden philosophischen Ansätze haben mich wiederum veranlasst, das Ziel einer „Kultur der Harmonie“ unveränderlich weiter zu verfolgen. In der Tat, dass ich Sie und Marianne Kleijwegt getroffen habe, hat meine Auffassung wieder gefestigt. Letzten Endes,

Holland und Japan haben ihre Freundschaft im Sinne einer über Jahrhunderte gepflegten friedvollen Beziehung, nochmals bestärkt, wie es die Laterne am Nikko Toshogu Schrein symbolisiert.

Sie haben mir sehr geholfen meine innere Berufung die „neue Kultur des Wa“ (Frieden und Harmonie) verstärkt auf der Basis von Sympathie mit Begegnungen, Synthesen und Fortschritt weiterhin intensiv zu verfolgen.

Akio Komatsu
Präsident Komatsu Electric Industries Co. Ltd
The Human, Nature & Science Institute Foundation

¹ Lafcadio Hearn: unter anderem literarische Beschreibungen der Menschen, Bräuche und der Kultur Japans.



島根県にある出雲大社拝殿
Izumo Taisha Shrine (Haiden, a hall of prayer) in Shimane Prefecture



ウィーン平和博物館の中庭に立つロレマ氏
Ingrid on the inner courtyard of the Peace Museum Vienna

Im Jahre 1988 gründete Akio Komatsu die Chikaku-juku, eine Lehranstalt für junge Geschäftsführer, ein Vorläufermodell der heutigen Human, Nature & Science Research Institute Foundation. HNS verfolgt das Ziel mit Weisheit (Anm. J.R.: eine der vier Kardinaltugenden des gesunden Menschenverstandes und der Einsicht zu denken und zu

handeln) mit tiefgreifendem Verständnis der Zusammenhänge, gesellschaftliche Veränderungen durchzusetzen.

1993 erscheint der biografische Roman von Herrn Osamu Kouekiba, der sich mit der Geschichte des Sutoh Yahee auseinandersetzt. Diese Novelle inspirierte Akio Komatsu sein Buch *IZUMO, das Land der aufgehenden Sonne* in 1999 zu verfassen. Ein Buch, welches sich mit seinen Friedensbemühungen beschäftigt. Offizielle, weltweite Reisen und Besuche zahlreicher Museen, die sich dem Thema Krieg und Frieden widmen, waren für sein fundiertes Verständnis der Zusammenhänge erforderlich und öffneten Komatsu, bei Einsatz der HNS-Möglichkeiten, alle Türen.

2014 wurde die Statue des Sutoh Yahee errichtet. Diese Skulptur wurde durch Worte der Weisheit von drei Friedensaktivisten begleitet. Ausgewählt wurden diese mit dem Ziel, alle Kriege in der Welt, durch die Wiederbelebung der Kultur der "wajo (Frieden und Harmonie)" für die Zukunft zu verhindern.

"Wer aber die Augen vor der Vergangenheit verschließt, wird blind für die Gegenwart." - Richard von Weizsäcker (1920-2015: Alt-Präsident des wiedervereinigten Deutschlands).

"Wirtschaftlichkeit ohne Ideen ist ein Verbrechen, und Ideen ohne Wirtschaftlichkeit sind Unsinn." "Eine Familie wird aufgegeben und Zehntausende Familien profitieren davon." - Ninomiya Sontoku (1787-1856: Landwirtschaftspezialist, Moralist und Philosoph während der Edo-Periode).

"Die Jugend kennzeichnet nicht einen Lebensabschnitt, sondern eine Geisteshaltung; sie ist Ausdruck des Willens, der Vorstellungskraft und der Gefühlsintensität. Sie bedeutet Sieg des Mutes über die Mutlosigkeit, Sieg der Abenteuerlust über den Hang zur Bequemlichkeit." - Samuel Ullman (1840-1924: amerikanischer Autor, Geschäftsmann und Humanist).

Nicht der Fels, sondern das Wasser

Felix Villanueva

Die Zeit fließt hinweg wie das Wasser eines Flusses
Konfuzius

In seinem meisterhaft geschriebenen Essay, *Watermark* (Wasserzeichen)¹ – eine Liebeserklärung, von Melancholie unterbrochen, an Venedig, die Stadt die ihr Wesen von ihrer eigenen sich ständig verändernden Reflektion im Wasser ableitet – entwickelt der russisch-amerikanische Dichter Joseph Brodsky (1940-1996) die bemerkenswerte Vorstellung der Gleichsetzung von Gott und Zeit. „Ich hing immer der Idee an dass Gott und Zeit identisch sind, oder zumindest sein Geist und die Zeit. Vielleicht war dies eine von mir erschaffene Idee, aber ich kann mich nicht mehr daran erinnern. Jedenfalls habe ich das immer gedacht. Wenn der Geist Gottes auf dem Wasser schwebt, so war das Wasser eingebunden, um ihn zu reflektieren.“²

Brodsky, der an den Ufern der Ostsee aufwuchs, benutzt diese biblischen Texte, um den Höchsten mit dem Element gleichzusetzen, das aufgrund seiner Fließfähigkeit und Durchlässigkeit nicht als statisches Element angesehen werden kann. Uns scheint das Wasser gerade so flüchtig wie die Zeit, das allmächtige Kontinuum, das alle Gedanken und Taten der Menschen, alles Gute und Böse, in einem nie endenden Strom, dem wir, die sterblichen Kreaturen uns immer und immer wieder entgegenstellen. Der ewige Kampf gegen die allumfassende Wirkung der Zeit - der Geist Gottes, der sich nach Brodsky im Wasser spiegelt – mag jedoch ein Teil der Sinnhaftigkeit und des Zwecks unseres Daseins sein.

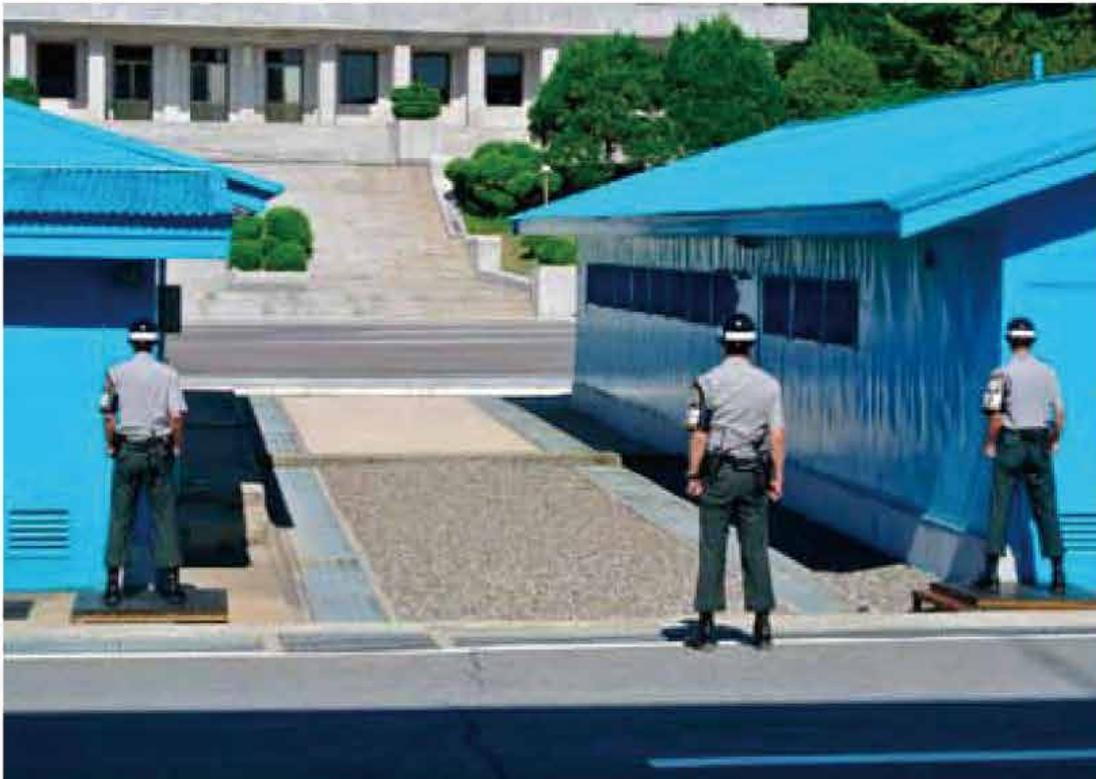
In seinem neuen Buch *Wasser, eine geophilosophische Geschichte* vermutet der Philosoph und Autor René ten Bos dass der Ursprung einer Idee nicht lediglich der Verbindung zwischen Subjekt und Objekt zuzuschreiben ist; die äußeren Lebensbedingungen und die Umwelt in der sich eine Idee entwickelt spielen ebenfalls eine tiefsinnige Rolle. „Die Landschaft, die Umwelt oder der Raum können nicht ausschließlich als ein naturwissenschaftliches oder materielles Phänomen

verstanden werden. Ein geistiger Aspekt spielt dabei eine Rolle.“³

Beispielsweise unterscheidet Ten Bos zwischen den philosophischen Konzepten von „potamicalen“ und „nautischen“ Köpfen. Der ersten Kategorie gehörten die Denker an, die von Flüssen umgeben waren wie der griechische Philosoph Heraklit, dessen geflügeltes Wort *Panta rhei, ouden menei* (Alles bewegt sich fort, nichts bleibt) noch zu unseren Tagen bekannt und gültig ist. Die zweite Kategorie umfasst die, die an Meeresstränden lebten, wie zum Beispiel der prosokratische Vorgänger von Heraklit, Thales von Milet, dem die Aussage dass alle Dinge aus Wasser bestehen oder vom Wasser abstammen, zugeschrieben wird. Es ist höchstwahrscheinlich dass die „geistige“ Lagunen-Landschaft Venedigs, die Stadt in der Joseph Brodsky – der sich dem Wasser der Ostsee und der Umgebung mit all seinen Kindheits-erinnerungen eng verbunden fühlte – wünschte bestattet zu werden, Brodsky in hohem Maße inspirierte seine ursprünglichen Ideen über Gott, Zeit und Wasser zu formulieren.

Die Küstenstadt Matsue, gelegen an dem Japanischen Meer (Sea of Japan oder auch East Sea genannt) im Nordwesten der Shimane-Präfektur und im Südwesten der Insel Honshu, wird „Wasserstadt“ oder auch mit dem Spitznamen „Venedig des Orients“, wegen der einzigartigen Lage, genannt. Der nördliche Stadtteil, gelegen auf einer Insel, wird vom Japanischen Meer durch zwei Lagunen getrennt, durch die Shinji-Lagune und die Nakaumi-Lagune. Der Fluss Ohashi fließt von West nach Ost durch diese zwei Lagunen durch die Stadt Matsue. Bei Hochwasser kehrt sich der Wasserstrom um.

Der Unternehmer und Friedensbotschafter Akio Komatsu wurde in Yakumo, Teil der Stadt Matsue, geboren, wo er auch aufwuchs. Die Stadt wird auch als eine der „Geburtsstätten Japans“ bezeichnet. Er



板門店の南北共同管理地帯
Joint Security Area between North and South Korea



ソウルにある安重根義士記念館
Ahn Jung-Geun Memorial Hall in Seoul

bekam eine Anstellung in einer lokalen Fabrik für die Herstellung von Landbaumaschinen und wurde für die Forschungs- und Entwicklungsarbeit der Landbaumaschinen eingesetzt. Nach dem Konkurs der Firma, begann er mit einer eigenen Firma in einer Scheune am „Eternal River Iu“ in seiner Geburtsstadt.

In den „Fünzigern“ baute er eine neue Firmeneinrichtung, gelegen auf einem Hügel mit einer wunderschönen Aussicht auf den Shinji-See am Fuß der Halbinsel Shimane, welche der koreanischen Halbinsel und dem eurasischen Kontinent gegenüberliegt. Mit den zahlreichen Heißwasserquellen ein beglückender Teil von Mutter Natur.

Komatsu hat schwer daran gearbeitet Sympathieplattformen im Interesse der menschlichen Förderung zu schaffen im Bemühen auf diese Art und Weise die Kultur des *Wa* (Frieden/Harmonie) zu vermitteln. Es ist wahrscheinlich dass seine Ideen durch die zahlreichen einheimischen Wasserläufe gefühlsmäßig beeinflusst wurden. Während seiner Jugendjahre könnten die Strömungen des Flusses Iu sowie die Spiegelungen in den sich kräuselnden Seen sehr wohl eine fortwährende Wirkung auf seine Seele gehabt haben.

Es ist nicht erstaunlich dass Akio Komatsu, als Direktor von Komatsu Electric Industries Co. Ltd und als Leiter der Human, Nature & Science Research Institute Foundation (HNS), sich durch das Wasser inspiriert fühlte. Mit seiner in Matsue gelegenen Firma hat er eine der weltweit fortschrittlichsten Wassermanagementsysteme entwickelt und aufgebaut. Er nannte dieses System *Yakumo Suishin*, Wassergott von Yakumo.

Ein sehr wichtiges Thema in den Schriften und Interviews von Akio Komatsu ist die gemeinsam zu tragende Verantwortung für das die Menschheit weltweit belastende Problem des Wassers. Er verleiht diesem Thema mittels Zitaten der klassischen chinesischen Philosophen wie Konfuzius, Mencius (Mengzi) und Laotse (Lao-Tse, Laozi) Nachdruck.⁴

Im Jahre 1994 stellte Akio Komatsu seine Beschäftigung mit der dem Wasser verbindenden Landesgeschichte durch die Gründung von Human, Nature & Science Institute Foundation, unter Beweis und star-

tete das Projekt „eine Stadt, ein Sehnsuchtsfeldzug“, welches unter anderem die Veröffentlichung von bibliografischen Romanen, Kinderbüchern, Karikaturen sowie die Organisation von Tagungen mit dem Ziel bedeutende Männer die eine gewichtige Rolle bei der Wasserkontrolle hatten, vorzustellen. 2015, im Gedenken an den vor 70 Jahren zu Ende gegangenen Zweiten Weltkrieg, veröffentlichte Komatsu den Roman *The Eternal River: die Geschichte des Sutoh Yahee* verfasst vom japanischen Autor Yasuko Murao. Dieses Buch, geschrieben in japanischer und englischer Sprache, hat die Legende von Sutoh Yahee (1651-1752), Häuptling der Stadt Hiyoshi/Shinji-See zum Inhalt. Heute wird Hiyoshi, als Stadtteil von Matsue, Yakumo genannt.

Die Geschichte spielt in einer Zeit als der Fluss Iu friedlich und ruhig durch Hiyoshi floss und den Bewohnern zahlreiche angenehme Sachen bot. Der Flusslauf durch die Stadt wurde durch den heiligen Berg Tsurugi unterbrochen der die Grenze zwischen dem „Land des Lebens“ und dem „Land des Todes“ markierte. Eines Tages, die Landschaft wurde durch wolkenbruchartige Regenfälle heimgesucht, wurde der heilige Berg zum Hindernis und verursachte schwere Überflutungen. Der Fluss war außerstande die gewaltigen Wassermengen zu verkraften und sprengte die Deiche. Häuser wurden zerstört, Menschen getötet, faktisch wurde die ganze Stadt hinweggeschwemmt.

Die Angst der überlebenden Bewohner vor Augen entschied sich Sutoh Yahee im Alter von 56 Jahren sein restliches Leben dem Kampf gegen den Berg zu widmen. „Das Glück der Bewohner hat Vorrang vor meinem Glück,“ sagte er. Er nahm Hammer und Meißel und begann den Berg abzubauen um den Flusslauf zu ändern. Auf diese Art und Weise sollte für die Stadt die Gefahr der Überflutung gebannt werden. Als Sutoh Yahee seine Arbeit beendete war er 97 Jahre alt. Fünf Jahre später verstarb er und fand die ewige Ruhe.

Die Geschichte dieses Mannes der den größten Abschnitt seines Lebens genutzt hat den Lauf des Flusses zum Wohle der Allgemeinheit zu verändern kann als beispielloses Vorbild für Ausdauer, Standhaftigkeit, Mut und Einfühlungsvermögen verstanden werden. Suto Yahees's Beharrlichkeit und felsenfeste Überzeugung die Landsleute vor mehr Drangsal und Leid bewahren zu müssen macht ihn zum Vorbild für Idealismus und Optimismus. Akio Komatsu setzt sich mit Herz und

Seele für den Weltfrieden und die Wiederversöhnung aller Menschen und für den Ausbau einer Weltkultur ein. Zusätzlich zu seiner intensiven Arbeit als Direktor einer innovativen Handelsgesellschaft besucht er zahlreiche Länder mit dem Ziel die Basis für ein neues Zeitalter zu legen, indem er die Vektoren zur „Neuen internationalen Arbeitsteilung (NIDL)⁵ und zur Aussetzung der Verbreitung der nuklearen Massenvernichtungswaffen für seine Ziel nutzt. Er ist überzeugt dass der Tag der weltumspannenden, friedlichen Koexistenz definitiv durch die Fortsetzung der nuklearen Abrüstung kommen wird.

Ein Platz für den Anfang dieses Prozesses wird das Izumo-Land in Japan sein gegenüber der koreanischen Halbinsel gelegen dort wo sich drei große Nuklearmächte treffen: China, Russland und Amerika. Komatsu hat den Verlauf der nuklearen Entwaffnung, ein Beginn kann in Izumo sein, ständig im Blick.

Akio Komatsu geht nicht den strategischen Weg der großen Politik um die Aufmerksamkeit auf seine selbstgewählte Mission zu lenken: lieber versucht er auf logischen und beweglichen Wegen der "zwanglosen Diplomatie" sein Ziel zu erreichen. Da, wie es der chinesische Philosoph Laotse im 6. Jahrhundert B.C. sagte: „Unter dem Himmel ist nichts anderes weicher und ergiebiger als das Wasser. Sogar um feste Körper und Bollwerke anzugreifen ist nichts besser: es hat nicht Seinesgleichen.“⁶

¹ Joseph Brodsky wurde 1940 in Sankt Petersburg, dann als Leningrad bekannt, geboren. Im Jahre 1972, nachdem er mehrmals nach Sibirien verbannt worden war, hat er in den Vereinigten Staaten von Amerika bis zu seinem Lebensende seinen Wohnsitz gefunden. Er ist als einer der einflussreichsten russischen Autoren der Nachkriegszeit angesehen. Im Jahre 1987 wurde ihm der Literatur-Nobelpreis zuerkannt. Im Jahre 1996 ist er einem plötzlichen und unerwarteten Herzanfall erlegen. Er wurde auf der Insel San Michel, in der Nähe von Venedig gelegen, beigesetzt.

² Joseph Brodsky, *Watermark*, Farrar, Straus und Giroux Inc., New York 1992, S. 41.

³ René ten Bos, *Wasser: Eine geophilosophische Geschichte*. Amsterdam 2014, S 14.

⁴ Im Taoismus, der Lebensphilosophie, sagt der Philosophie-Vorläufer Laotse: "Das höchste Gut ist wie Wasser."

Das Image des Wassers wird zur Beschreibung der Werte Menschlichkeit, Anpassungsfähigkeit, Ausdauer und Akzeptanz des täglichen Lebens genutzt.

⁵ Im Sinne des Wirtschaftsausdrucks der alten "Internationalen Arbeitsteilung" (bis 1970) wurden die unterentwickelten Länder in der Weltwirtschaft vor allem als Anbieter von einigen Mineralien und Rohstoffen "eingestuft", mit dem Resultat einer weltweiten Ungleichheit der produzierenden Wirtschaft. Im Gefolge und als Resultat der Globalisierung haben Theoretiker danach den Begriff "Neue internationale Arbeitsteilung" (NIDL) geprägt. Damit wird die geografische Verlagerung der "Fertigungsindustrie" aus den "kapitalistisch geprägten Ländern" in die "Entwicklungsländer" dargestellt.

⁶ Dao De Jing II/78.



2015年6月、ハーグの平和宮グレート・ホール・オブ・ジャスティスで行われた、ベルタ・フォン・ズットナーとアレッタ・ヤコブスについての学会で、ロレマ氏は講師の一人として招かれた
June 2015. Conference about Bertha von Suttner & Aletta Jacobs in the Great Hall of Justice, Peace Palace in The Hague. Hope May and her team. Ingrid Rollema is one of the speakers

Colophon

著者

小松昭夫
フィーリックス・ピラヌーバ

責任編集者

マリアンヌ・クレイジュベグト

翻訳

日本語—中村新一郎
英語—マリー・ルイズ・ショーンデルガンク
韓国語—金美正
中国語—魏亜玲
ドイツ語—ヨハネス・リープマ

写真

ロビン・ルツ、マリアンヌ・クレイジュベグト、
アストリッド・ノーベル、
小松電機産業株式会社

グラフィック・デザイン

ゲールト・スモレンブルグ

印刷

レカファ印刷(オランダ国ベンロ市)

発行所

ボーベンカーマル出版、2016年1月

Author:

Akio Komatsu
Felix Villanueva

Final editor:

Marianne Kleijwegt

Translations:

Japanese – Shinichiro Nakamura
English – Marie Louise Schoondergang
Korean – Mijeong Kim
Chinese – Yaling Wei
German – Johannes Riepma

Photography:

Robin Lutz, Marianne Kleijwegt,
Astrid Nobel,
Komatsu Company

Graphic design:

Geert Smorenburg

Print:

Rekafa, Venlo

Publisher:

De Bovenkamer, January 2016

ISBN/EAN: 978-90-807286-8-4

Front cover: アストリッド・ノーベル・『ホライゾン』2013年

Astrid Nobel: *Horizon* 2013, Indian ink on paper, 29,7 x 42 cm.

Inside front: イングリッド・ロレマ、小松昭夫阿氏のウィーンでの出会い。右はイップ常子氏と金美正氏

Ingrid Rollema and Akio Komatsu meeting in Vienna. On the right Mrs. Tsuneko Ipp & Mijeong Kim

Back cover: 安重根(1879-1910)の署名入りの絵と手形

The Korean activist Ahn Jung-Geun (1879-1910) signed his drawings with his handprint.

Inside back: 2014年11月、松江市で開催された国際シンポジウム後のベルタ・フォン・ズットナー像

Sculpture Bertha von Suttner after the conference in Matsue, November 2014



www.ingridrollema.nl
www.komatsuelec.co.jp
www.debovenkamer.nl

www.theatreofwrongdecisions.eu
www.hope-foundation.nl



大韓國人安重根書